

ひろしまレポート

第29回広島平和記念式典参加事業及び西予市交流事業



松 本 市



広島^{ともしび}の平和記念公園内に設置されている「平和の灯」

「平和の灯」は、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という趣旨で1964年8月1日に設置され、全国12宗派から寄せられた「宗教の火」と溶鉱炉などの全国の工場施設から届けられた「産業の火」が、1945年8月6日生まれの7人の広島^{ともしび}の乙女により点火されました。

目 次

○松本市長あいさつ

○ヒロシマの願い

○レポート

今から未来を	清水中学校2年	林 優 大	……	1
広島を訪れて	清水中学校2年	漆 畑 葉 奈	……	2
生きているありがたさ	鎌田中学校2年	相 馬 健 吾	……	3
平和祈念式典を終えて	鎌田中学校2年	小 林 奏 和	……	4
「平和と暮らす」	丸ノ内中学校2年	浅 輪 慶	……	5
最初で最後の日にするために	丸ノ内中学校2年	丸 山 穂乃香	……	6
ヒロシマ・愛媛	旭町中学校2年	木 下 泰 秀	……	7
無題	旭町中学校2年	篠 田 昭 子	……	8
「平和学習」	松島中学校2年	平 田 太 朗	……	9
伝えたいこと	松島中学校2年	小 澤 小 梅	……	10
広島を訪れて	高綱中学校2年	久保原 心 凧	……	11
平和の為に	高綱中学校2年	新 村 鈴 花	……	12
世界を平和にするために	菅野中学校2年	大 月 佑 太	……	13
雲一つない広島で	菅野中学校2年	白 井 乃々夏	……	14
消してはいけない悲しみ	筑摩野中学校2年	上 條 奏 夢	……	15
命と歩む	筑摩野中学校2年	臼 田 有貴子	……	16
残したい思い	山辺中学校2年	小 林 義 明	……	17
当たり前であることに感謝	山辺中学校2年	二 木 瑠 心	……	18
自分たちにできること。	開成中学校2年	田 中 都 夢	……	19
核廃絶を願って	開成中学校2年	清 水 友 結	……	20
原爆孤児の存在	女鳥羽中学校2年	野 澤 卓 矢	……	21
平和の灯を消す為に私達が出来る事。	女鳥羽中学校2年	矢 羽 姫 和	……	22
平和な世界へ	明善中学校2年	關 大 翔	……	23
核兵器の無い平和な世界へ	明善中学校2年	宮 越 陽	……	24
明日の平和	信明中学校2年	山 崎 優 太	……	25
平和な世界の尊さ	信明中学校2年	土 屋 星莉奈	……	26
人の心	会田中学校2年	大 塚 宗 汰	……	27
無題	会田中学校2年	小永井 木 瑤	……	28
「平和」へ向けて	安曇中学校2年	藤 山 和 宏	……	29
8月6日の恐怖	大野川中学校2年	斉 藤 具 海	……	30
世界中が平和な未来を願って	梓川中学校2年	飯 田 歩 夢	……	31

小さな平和から前へ	梓川中学校2年	山下 小雪木	……	32
無題	波田中学校2年	野村 風雅	……	33
無題	波田中学校2年	星野 優希	……	34
「伝えられていない現実」	鉢盛中学校2年	籠田 渉	……	35
これからを考える	鉢盛中学校2年	濱 涼夏	……	36
「平和」とは何だろうか	信大附属松本中学校2年	久保田 興輝	……	37
「平和のために」	信大附属松本中学校2年	音 琴光里	……	38
繰り返させぬから	才教学園中学校2年	塩原 遼大	……	39
平和な未来のために	才教学園中学校2年	前田 心春	……	40
原爆と平和	松本秀峰中等教育学校2年	千葉 快智	……	42
「あたりまえ」をいつまでも	松本秀峰中等教育学校2年	宮本 梓菜	……	44
○写真記録			……	45
○平和へのメッセージ			……	48
○広島平和記念式典				
平和への誓い			……	49
平和宣言			……	50
○旅の日程			……	52
○参加者一覧			……	53
○松本市中央図書館平和資料コーナー常設図書一覧表				
一般図書・郷土資料			……	54
児童図書			……	68

※掲載の感想文については、できるだけ本人の作文を尊重しています。



中学生の皆さんへ

松本市長

菅 谷 昭

今年も、新しい時代の担い手となる中学生代表42名の皆さんにご参加いただきました「第29回松本市広島平和記念式典参加事業及び西予市交流事業」のレポートが発行となりました。

昭和20年8月6日、世界で初めて原子爆弾が投下された広島のみならず、一瞬にして無残な姿に変わり果て、正確な人数もわからないほど多くの皆さんが亡くなりました。その一瞬を生き延びた方々も、心と体に深い傷を負い、今もなお原爆の影響によって苦しみを続けています。

松本市では、この悲劇を繰り返さないためにも、平和を愛するすべての人々とともに、核兵器の廃絶と、戦争のない明るいあすの郷土を願い、昭和61年に「平和都市宣言」を行いました。

そして、この宣言に込められた想いを次の世代につなげていくために、中学生の広島平和記念式典への参加事業をはじめとする様々な平和推進事業を行ってきました。また、近年は「親子平和教室」の開催や、大学生などの若者が平和について学び、発信する「松本ユース平和ネットワーク」の立上げなど、平和を創る若い世代を育成する新たな取り組みも始めています。

しかしながら世界では、各地で紛争やテロが発生し、加えて核の脅威も消えない状況にあります。

世界で唯一の被爆国である日本だからこそ、核兵器の廃絶や世界恒久平和を全世界に向け訴え続けていくとともに、平和のすばらしさ、

戦争の悲惨さを伝えていかなければなりません。

原爆投下から74年が経過し、被爆者の平均年齢が82歳を超える中、被爆体験をどのように語り継ぐかが課題となっています。被爆者のお話を直接聞くことのできる「最後の世代」となる皆さんが、被爆の実相や戦争の恐ろしさ、そして平和の大切さや命の尊さを、一人でも多くの仲間や知り合い、家族に自らの言葉で伝えていってください。そして、平和な未来の実現に向け、絶えることのない「平和の連鎖」を次の世代につなげていってください。

また、広島平和記念式典後に訪れた、愛媛県西予市では、宇和の自然・歴史・文化を楽しみ、そして、なにより宇和中学校の皆さんとの交流を楽しまれたことと思います。宇和の地で築いた絆と「教育」と「文化」で結ばれた繋がりを今後も大切にしていってください。

これからを担う皆さんが、今回の事業を通じて、平和について深く考え、成長し、松本から世界に平和を発信できる人材として、大きく羽ばたいていくことを願っています。

結びに、ご指導、ご協力をいただきました先生方、温かく送り出してくださいました保護者の皆さん、事業実施にご協力いただきました多くの方々に深く敬意を表するとともに、心から感謝を申しあげ、あいさついたします。

ヒロシマの願い

The Prayer of Hiroshima

「^{げんぱく}原爆^おに会った」と、^{ひばく}被爆した人たちは言います。一瞬の破壊、あまりに多くの死、大切な家族さえ救えなかった苦しみ _____ 言葉では表現しきれない出来事に「出会ってしまったからでしょう。あの8月6日とそれに続く日々は、「思い出すことさえつらい」ことです。被爆者はその思いを乗り越えて自分の体験を語り伝え、再び核兵器を使ってはいけないと、広島^の地から訴えてきました。

「ヒロシマ」は世界共通の願いと結びあい、平和を実現したいといつも願っています。

Hibakusya say simply, "I met with the A-bomb." Perhaps they use this expression because the event they "met with" defies description an instant of massive destruction, mind-numbing death and injury, and the grief of watching helplessly as family members, relatives, friends, and neighbors died in agony. They also say, "It's painful even to remember." The A-bomb witnesses have overcome that pain and are passing on their experiences of that day. They feel duty bound to tell the world why nuclear weapons must never be used again.

The continual prayer of the A-bombed City Hiroshima is to unite humankind toward our common goal, genuine and lasting world peace.

(広島平和記念資料館 収蔵品より)

今から未来を

清水中学校2年

林 優大

僕は8月5日、6日、7日の広島市平和記念式典及び愛媛県西予市交流会で、核兵器や原爆、それを巻き起こす戦争の恐ろしさや、様々なことを学びました。

被爆者講話では、被爆した方のその当時のことや、そこから長年味わった苦しみを語って下さいました。被爆者の方は、8月6日の投下時には、広島の大原地区にいて、消失区域内にいたその方のお姉さんが迎えに来てくれたそうですが、黒い雨のせいで半年後にはその方以外の家族全員が亡くなってしまい生きるためたった一人で路上生活を長年おくりました。数年後、原爆投下の時に降った、放射能が含まれた真っ黒な雨の影響でたくさんの人が白血病で亡くなってしまっていたそうです。また当時は食べる物は無く、道に落ちていた新聞を食べていたそうです。しばらくして、ヤクザのような人が広島で子供たちに仕事を与えてくれましたが、数千人の人が暮らしていたので、そう多くやとわれず、お話しをお聞きした被爆者の方のように、富んだ暮らしの方々から物を奪い生きていた人もいっぱいいました。30才になり、死にたくなってしまい、岡山にまで逃げたしましたが、そこでうどん屋さんにやとわれ、必死に働いたそうです。また、婚約相手できたのですが、その家の人に「被爆した人の子供なんか産んだら病気が出る」等と差別を受け、結局別れたこともあったそうです。他にも、差別のせいでやとってもらえない人もいたそうです。60才になり、広島で大原地区の仲間と再会したとき、当時100人以上いた仲間が60人しか居ず、改めて原爆の恐怖を味わったそ

うです。

この話を聞いたときはまだ本当にあった事とは思えなかったのですが、その後、初めて原爆ドームを見て、少し実感しました。そして平和記念資料館の展示を見たときに、味わったことのない苦しみを味わった人々の遺品や、焼け跡から見つかった遺体の写真、黒い雨のついた壁などを見て、とてつもない恐怖を感じました。実際に体験してもないけれど、やっと広島に原爆が落とされた現実に向き合えたと思えました。もし自分が被爆したらと考えると、今の自分に想像もできない苦しみを味わうのでしょう。でも、僕はこれから先、誰も同じ目にあってほしくないと思っています。そのためには、一人一人が日々平和を感じる世界に少しずつ変えていくことです。

今を生きる私達の世界は、平和でしょうか。核兵器を所持している国は多いです。このまま核の実験を続けていたら、また人類は同じ過ちを繰り返してしまうことになります。そんなことをさせないという意識を深めるためにも、戦争の過去を伝え、次の世代に継がせることが、平和につながってくるのではないかと思います。そうすれば、今から未来を平和に繋げることができるのです。これらのことが僕が学んだ全てです。

広島を訪れて

清水中学校2年

漆畑 葉奈

今回、私は初めて広島に行きました。駅に降り立ってから見えた景色は、高層ビルが立ち並び、たくさんの人が行きかい、活気があふれているようでした。私には、74年前この街に原爆が投下されたということが想像できませんでした。しかし、原爆ドームを見たときに、周りの景色との違いに衝撃を受け、ここは被爆地なのだと実感しました。原爆ドームはあの日から時間が止まったまま、ずっと戦争の悲惨さを伝え続けているのです。

今年、平和記念資料館は、リニューアルして被爆の実相をより感じやすくなったといえます。そこには、8月6日広島に何が起こったのか、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真が展示してありました。強烈な熱線により、服の模様が肌に焼き付いてしまった女性の後ろ姿の写真。人影が焼き付いてしまった階段。中でも印象的だったのが、焼け野原に何十個もの頭蓋骨が放置されている傍らで、少女が座っている写真でした。原爆の人体に及ぼす影響がこんなに恐ろしく、悲惨なものかと衝撃を受けました。そして、そんな被爆の惨状をより多くの人に知ってもらわなければならないと思いました。

被爆者の方の話には、「原爆を落としたアメリカを憎んでも平和はこない。今の私たちは、決してあたりまえではない、食べられることに感謝をし、様々なことを学ぶこと。そして、過去は過去として受け入れ、自分たちの身の回り

から平和にしていくべきだ。」という言葉がありました。被爆者の方は当時、石をなめたり、新聞紙を食べたりして飢えをしのいでいたそうです。今の私の恵まれた生活環境からは掛離れています。何一つ不自由のない暮らしの中で、もっと食べ物に感謝し、積極的に学び、一日一日を大切に過ごしていきたいと思いました。

今回の広島訪問において、今の私たちの生活がどれだけ平和なのか、その平和のありがたさや私たちがしていくべきことを学びました。今も、広島では、被爆してから数日後に走り始めたという被爆電車が走っています。当時は、多くの広島の人を元気付けてくれたことでしょう。その、あの日と今をつなげてくれている被爆電車のように、被爆した方の記憶を後世に伝えることが私たちの役目だと感じました。決して、あの日を繰り返すことなく、広島に続いて長崎を最後の被爆地にすること。そして、誰もが日々平和を感じることでできる世界になることを願います。

生きているありがたさ

鎌田中学校2年

相馬 健吾

今から74年前、1945年8月6日午前8時15分に広島で一瞬にして14万人の尊い命が失われました。街は燃え、助けを求める人や遺体で埋めつくされてしまった広島。今回、僕は初めて広島の街を見て、この活気ある街に原爆が落とされたなんて信じられませんでした。しかし、被爆者の川本さんのお話を聞き、改めて原爆の恐ろしさ、残酷さを知りました。

当時、6年生だった川本さんは、原爆が落とされたその時、中心地から離れたお寺に疎開していたので助かったそうです。お母さんと弟、妹は原爆で亡くなってしまったので、川本さんのお姉さんが迎えに来てくれたそうです。しかし、そのお姉さんは半年後に白血病で亡くなり、お父さんともう一人のお姉さんは今も消息がわからないそうです。その後、川本さんは施設に入ることもできず、しょうゆ屋で住み込みで働きました。家族全員を失い、11歳で働きながら生きていかなければならなかった川本さん、僕は今14歳ですが、そのようなことは絶対にできないと思いました。川本さんは、結婚したい人がいてもその人の両親から被爆者だと反対され、広島から離れ、死に場所を探し、たどり着いた岡山のうどん店で、もう一度人生をやり直す決意をしました。「お前はやればできる。」という生前のお母さんの言葉があったから今、川本さんは強く生きておられるのかなと思いました。

また、原爆を落とされた当時の小学生たちの中で、引き取ってもらえなかった子どもたちは街に落ちている新聞紙などを食べて生きていたというお話も聞きました。川本さんのお話を

聞いて、食べたくても食べられない、勉強したくてもできない、生きたくても生きていけない当時の子どもたちに比べて、今の自分たちの生活は決して当たり前じゃないことを痛感し、今ある生活に心から感謝したいと思いました。

平和記念資料館では、目を背けたくなる写真や物がたくさんありました。肌に衣服の模様がついてしまっている写真、子ども達が使っていた三輪車、丸焦げになったお弁当箱。全ての展示品が原爆の恐ろしさを伝えていました。資料館にいただけでまるで自分が当時の広島にいるような気分になり、この状況の中にいたら、僕はどう生きていたのだろうと、考えさせられました。原爆は、全ての人を悲しい思いにしまうもので、もう二度と使ってはならないのだと、より一層強く感じました。

僕はこの広島での学習を通して、原爆の恐ろしさ、戦争の愚かさを学びました。また、今の平和な世界のありがたさや命の尊さも学ぶことができました。6日の平和記念式典では外国人の方々もたくさんいました。世界中の人々が平和を望んでいるはずですが、今すぐ世界中を平和にすることはできませんが、僕は今回の学習で学んだこと、感じたことを周りの人に伝え、自分の周りから平和を作っていく、長崎を最後の被爆地にしたいと思います。

平和祈念式典を終えて

鎌田中学校2年

小林 奏和

令和という新しい時代を迎えた今年も、あの日から74年経った広島市で平和祈念式典が行われました。「祈念」には「心を込めて祈る」という意味があります。式典に集まった誰もが戦争に心を痛み、失われた尊い命へ祈った8時15分。私は前日に聞いた被爆者の方の壮絶な体験を思い出し、黙とうをしました。

8月5日、「被爆体験者講話」として、当時小学6年生だった川本省三さんのお話を聞かせていただきました。たった1つの爆弾によって、鉄が溶けるほどの熱さと光、全てを吹き飛ばした爆風、放射能が広島のみならずもたらされました。ご両親やご兄弟もほとんどが亡くなられて、川本さんとお姉さんの2人だけで生きていかなければならなかったそうです。そうした戦争孤児はたくさんいて、路上で生活をする人も少なくありませんでした。生きていくために、食べ物をもっている人からうばってお腹を満たしたり、新聞紙を食べるときもあった、と悲しげな表情で語られていたのが印象的でした。

小学校を卒業していなかったので仕事にもつかなかったこと、縁談も「生まれてくる子どもが心配だ」と断られたこと…。原爆がなければ送っていたはずの明るい人生は、あの一瞬のできごとでうばわれてしまいました。その後川本さんは、「あきらめずにやればお前はできる」というお母さんの言葉を励みにもう1度やり直すことができたそうです。広島を離れて暮らしていた彼は、一緒に疎開していた仲間からの連絡をきっかけに地元へ戻り、語り部の活動をはじめたそうです。

ところが、その仲間に「やめてくれ。あの時からどうやって生きてきたか、家族に話していない。」と止められました。「今生きているとい

うことは、あの時誰かを傷つけたということだ。」その言葉からは、いつまでも消えない戦争体験者の苦しみが痛いほどに伝わってきます。

けれど、川本さんは「それでも、記録には残らない本当の戦争のすがたを知ってほしかった。」苦しみをともにした仲間にも止められても語ることをやめなかった、その決意は平和を強く願う気持ちがあらわれているように感じました。簡単には現実味を感じられないくらいの壮絶な体験をしてもそれを語りつぎ、未来がよりよくなることを願い行動する川本さんの姿勢は、私自身も勇気づけられるものでした。

講話の最後に、「相手国に対して恨む気持ちはありますか。」とたずねると「いつまでもそういう気持ちをもちつづけるのはよくない。起こしたこと、事実は認めて、でも過去のことは過去のこと。くりかえさないためにどうしていくかが重要だ。」と力説し、そのために「話し合い」をすることが大切だと何度も語られていました。

ただ平和は大事だと繰り返すようなきれいごとではない、生々しいリアルな戦争体験を知ることによって二度と戦争を起こさない未来をつくっていくことができるのではないかと思います。近年は、戦争の話について受け身になっている人が多いように感じます。私も以前はそうでした。けれど、今世界を動かしている人々やこれからの社会を築いていく私たちの世代は1番学ぶべきなのではないか、と感じた今はこの3日間の経験を無駄にせずこれからも平和について考えていきたいと思っています。

「平和と暮らす」

丸ノ内中学校2年

浅輪 慶

僕は8月5、6、7日で広島に行きました。5日に被爆者の川本さんから当時のお話をお聞きしました。8月6日の午前8時15分広島に一発の原子爆弾が落とされました。たった一瞬のことです。広島が焼け野原と化しました。建物が崩壊していたため、広島駅から、瀬戸内海が見えたそうです。そして多くの犠牲者ができました。原爆の熱線や爆風が広島の人々におそいかかりました。そんな中、川本さんは奇跡的に助かりました。ですが、周りは焼けてしまったため、食べ物がありませんでした。捨てられていく新聞が唯一の食べ物でした。今の僕には、とても考えられません。放射能も消え、数年がたったころ、川本さんに婚約者がいました。ですが、相手の両親の方に「あの時、放射能を受けた人だから、汚染している。そんな人といっしょになったら障害を持った子が生まれる。」と言われ、差別されたそうです。僕は、その事実ショックを受けました。川本さんも、とても悔しかったと言われました。行くあてがない川本さんは、広島を出て、岡山まで行きました。当然周りは自分のことを知らないの、人生をやり直せるかもしれないと思ったそうです。

川本さんは一度死のうと思う時があったそうです。ですが、そのとき、母が言った言葉を思い出したそうです。「やる気がないから、できない。本気でやってみなさい。」と。それから、そうざい屋などを開き、平凡に暮らしていました。ある日、小学校の頃の友達から、電話

があり、いっしょに祝いをしようと言われました。ですが、集まったのは、3分の1の人数だけでした。その事実が悔しくて、悲しかったそうです。そこで、この思いを子どもたちに話してあげたいと思うようになったそうです。川本さんは、今の子どもたちを、当時の日本とアメリカのように、自分のことしか考えていなくて、話しができていないと思っています。僕が特に印象を持ったのは、「今の子は自由すぎる」という川本さんの言葉でした。何でも買ってもらえ、何でも食べさせてもらえる、学校に行けること、友達がいること、何もかもが当たり前になっている。今の現状を見直さなければならぬ、そう思いました。そして、今の若者が1人でも多く意識してくれれば、平和の輪が生まれる。それを僕たちが、つないでいき、いずれ大きな輪にすることが大切だと感じました。今の人たちは、声をかけあえないから、信頼関係が作れない。今、自分が声をかけてもらえる存在か、周りから信頼されているか。人は小さなきっかけで大きく変わる。それが良い方向にも悪い方向にも変わる。いつもの日常が当たり前ではないこと、そして、人と人との関わりを深めることが必要であると、あらためて思います。これらのことを忘れず、今の自分の生活の仕方を変えていきたいです。

最初で最後の日にするために

丸ノ内中学校2年

丸山 穂乃香

私は、8月5、6日に世界初原子爆弾が投下された地、広島を訪れました。私は初めて広島を訪れましたが、今から74年前に原爆が落とされたとは思わない程、活気づいていました。

しかし、その思いはある物を目にした途端、悲しみ、恐ろしさに変まりました。それは原爆ドームです。まるで、そこだけ74年前の8月6日の午前8時15分のまま、時間が止まっているようでした。

1日目に、広島平和記念資料館を訪れると、たくさんの遺品、被爆者が原爆の残酷さをそのまま描いた絵、当時の目を背けたくなるような写真が目に飛び込んできました。そして、これは全て人間が作り出し招いた結果なのです。資料館を出た後もずっと、そこで見てきたものが頭から離れず、被爆者の叫びが聞こえてくるようでした。

そして、その当時の様子を被爆者の川本さんから伺いました。原爆が落とされた直後は周りの建物が全てと言っていいほど破壊され、向こうの海まで見えるほど何もなかったそうです。家族も亡くなってしまい、川本さんはひきとられて生活を送りました。川本さんは、「当時は、外国のことを調べるとスパイと言われ、お互いに理解し合えなかった。でも今は、世界中の人と友達になることができる。お互いが信頼し合って、声を掛け合える新しい社会を創ってほしい。それだけを願っている。」とおっしゃいました。今では、SNSなどを通じて世界中の人

と話せます。でも、それは当たり前のことではなく、とても幸せなことなのだと実感しました。

2日目に、愛媛の西予市の中学3年生の先輩と交流をしました。旧開智学校と姉妹学校の開明学校で、昔の学校について楽しく授業をしてくれたり、古写真の再写真コンテストをして盛り上がりました。

最初は緊張したけど、明るくて優しい先輩のおかげで、とても楽しい交流になりました。

でも、その楽しさも優しい先輩も、原爆は一瞬で奪っていきます。私は、絶対に嫌です。

今、「戦争を経験した人」が少なくなっています。そんな世の中だからこそ、私達の世代が、戦争の残酷さ、恐ろしさ、愚かさを学び、それを後世に伝えていく義務があります。戦争は人類史上最悪の出来事で、辛くても目を背けてはいけません。人間が始めたことは人間が終わらせなくてはならない、私達にはそれが出来るはずです。

74年前のあの日が、被爆の最初で最後の日になることを願い、更にそれを実現させるために自分達が出来ることを考え、実行していきたいと思います。今回このような機会を与えて下さり感謝します。

ヒロシマ・愛媛

旭町中学校2年

木下 泰秀

「死」この言葉こそ74年前の広島を表す言葉だと思う。僕は8月5、6、7日の3日間で一生に一度しかできない大切な経験をさせていただいた。一番初めに書いたように、74年前の8月6日に広島に原爆が落とされ、広島は「死の町」となった。初日の8月5日にはその原爆を体験した被爆者の方のお話をお聞きした。その方のお話は耳をふさぎたくなるほど原爆の恐ろしさが伝わってくるものだった。それは原爆により35万人以上の方々の方が亡くなり、今でも放射能の影響で苦しんでいる方々も多くいること、食料は落ちている新聞、水は石をなめることにより喉の渇きを癒やしたこと、生きていくために人に暴行を加え物をうばっていたこと、血を売りお金を手に入れていたことなど、今ではあり得ない現実の数々をお聞きした。なかでも、放射能を浴びていないにも関わらず「広島県民」ということだけで結婚も就職も出来なかったと聞いたときには差別という言葉が頭に浮かび、一層心が痛くなった。そしてその方は何度も「食べられる、勉強できることに感謝をして話し合いを素直にして下さい。」と仰っていた。この言葉を聞き感謝の大切さを改めて感じた。その後「広島平和記念資料館」へ行き写真や被爆者の方が描いた絵、言葉、遺品などを見学した。そこには実際に来て見なければ伝わらない「恐ろしさ」「本物」があり言葉を失った。被爆者の方の歌で「男女の区別さえ出来ない人々が、衣類は焼けただれて裸同然。髪の毛も無く、目玉は飛び出て、唇も耳も引きちぎられたような人、顔面の皮膚も垂れ下がり、全身、血まみれの人、人。」という

ものがあつた。これを読んでいる方も少し目を閉じてこのような残酷な世界が目の前に広がって歩いて歩いても歩いても歩いても同じ光景が続くことを想像してください。想像しても現実味が全く無いことかと思えます。それほど残酷で怖く、恐ろしい戦争、原爆の真実が「広島平和記念資料館」にはあつた。そして次の8月6日は74年前に原爆が落とされた日であり、「平和記念式」が行われた日で僕も出席させていただいた。その式では多くの外国の方も出席されており、様々な国で平和が祈られていることを知り感動した。式が終りそのまま僕は旧開智学校と姉妹館である、愛媛県の西予市、卯之町にある「開明学校」に移動し、西予市に住む生徒の皆さんと交流した後、明治時代の町なみを散策しとても穏やかな時間を過ごした。最終日は朝から夕方までバス・新幹線・電車と乗り継ぎ松本に帰ってきた。

冒頭でも書いた通り、この3日間という時間は僕にとってとても貴重な経験となった。広島では人の命の尊さ、戦争、原爆の恐ろしさ、多くの人の苦しみを、愛媛では長野から離れている身近な関係を。これらの経験ができたことに感謝をし、広島で学んだことの大切さ真実を伝えていきたいと強く感じた。

無題

旭町中学校2年
篠田 昭子

今、広島は人口約119万人ほどの大都市で、とても栄えている街です。74年前の8月6日、原爆が投下されたのだとは信じ難い景色が広がっていました。

あの日、8月6日は素晴らしいほどの晴天でした。しかし、朝8時15分。一瞬にしてその空は目もくらむような光と強烈な熱におおわれたのです。見わたす限りが焼け野原。川には沢山のご遺体が横たわっています。さらには、大火傷をした人の悲鳴にも似た叫び、親を呼ぶ、また子を呼ぶ声がこだまします。見たくなくても、聞きたくなくても、目や耳に入ってくる地獄のような光景は、どれだけの人を苦しめたのか知りません。

まだ、それだけの被害では終わりませんでした。原爆によって空にのぼった黒雲は、放射能をいっぱい含んだ雨を降らせます。これによって『原爆症』と呼ばれる白血病などの病にかかり、亡くなる人が多勢いました。原爆の被害を写した写真や遺品はその存在で私たちの想像を越える言葉で言い表せないほどの恐ろしさを語っているようでした。

今の日本は平和です。しかし、世界に目を向けてみると、宗教や民族の対立などによって紛争が絶えません。今この瞬間にも幾多の戦争や

争いによって亡くなる方が何人もいらっしゃいます。

戦争・原爆体験者の減少・高齢化によって話をしてくれる方が減っています。私たちは戦争も原爆も体験していません。でも、体験者の方のお話を聞き、語りべとして近くの人へそのことを伝えることはできます。

日本は唯一の被爆国です。日本以外に、また日本の中の別の都市に、原爆や核による被害をもう起こしてはならない。74年前と同じ過ちを繰り返してはならない。悲惨な原爆の実相を後世に伝えていくこと、世界に発信していくことが今の日本に生きる私たちの使命だと思います。最後に、語りべの方の、

「今あるあたり前のことに感謝して、楽しく学校へ行って、おいしいご飯を食べて成長してほしい。」

という言葉に胸に生活したいです。貴重な体験を有難うございました。

「平和学習」

松島中学校2年

平田 太朗

僕がこの夏に平和学習で感じた事、改めて思った事は三つあります。

一つ目は原爆が落とされた後にもひさんな事があると分かりました。中には、食べる物が無くやわらかい新聞紙を食べてうえをしのいだり、人から物を盗んで生活していた人もいたりしていたそうです。その話で僕が思った事は、原爆が落とされた後でも地獄が続いているのだと思いました。

二つ目は、原爆が投下されその熱風や放射線の被害はとてもひどく、とても記おくに残った事です。平和資料館には、背中にやけどをおおひ皮膚がケロイド状になってしまった人や、全身が黒く焼けてしまった物などもありました。僕はその写真を見た時すぐに目を背けたくなりました。ひどい物では、被爆して黒いつめが生えてきてその中に血管が入っている物もあったので見ていてとても、辛かったです。

三つ目は、原爆がもたらした自然被害です。一つ目は地面に残って放射線を出す残留放射線です。家族などを助けに行った人たちがその残留放射線で、被爆してしまった場合も合ったそうです。二つ目は放射線が水蒸気になりそれが、黒い雨となって降ってきてその雨に当たるのも危ないのに当時の人たちは水が無くその

雨を飲んでしまって内部被爆をしてしまった人が多かったそうです。この話を聞いて僕はとてもこわくなりました。黒い雨でもこわいのにそれを飲んでしまった人がいたからです。これらの三つの話を通して僕が改めて思った事は、原子爆弾や戦争は、何も生まずただ多くの人が苦しんで死んでしまったり、家族など大切な物が全て無くなってしまうからです。なので写真で見たような景色がもう二度とこの世界のどの国でも絶対に起こらないように僕は自分ができる限りの、努力をして、二度と戦争や原子爆弾が落とされるような事が絶対に無いようにしていきたいと思いました。

伝えたいこと

松島中学校2年

小澤 小梅

「どうか、目をそらさないでください。」

写真家の山端庸介さんの言葉です。この言葉は私の胸に深くつきささりました。

広島平和学習の話を生から聞いたとき、私は実際に行ってみて広島で何が起こったのかを見てみたいと思いました。しかし、私は広島について何も知りませんでした。そして、そのことを父に話すと父はたくさんの資料や本を持ってきてくれました。私が最初に手にとったのはある写真集でした。そこには、まだ小さい子供が目をむいて焼けただれている様子や片足立ちのまま焼けこげて亡くなっている人のもう嫌だ、これ以上見たくないと思う様な写真が写っていました。

しかしその時、私の目にある一文がとびこんできました。

「どうか、目をそらさないでください。」この言葉を見て私ははっとさせられました。この広島に起こったことから目をそらしてはいけないのだと。この一文をきっかけに、私は広島へ行こうと決心したのです。

しかし、広島へ行って平和記念資料館を訪れた時、私は思わず目をそらしそうになりました。目の前に目が片方とびでた、全身ケロイドの人の写真があったのです。髪の毛はなく、とびでた目は半分くさっていて…。とても、直視できるようなものではありませんでした。でも

「どうか、目をそらさないでください。」この、私の胸に深くつきささった言葉が、すんでのところ目そらそうとするのをひきとめてくれました。そうだ、見ているだけで苦しくなる広島に起こった現実から目を背けてはいけな

い。私はそのために広島まで来たのだと思い、その苦しみを受けとめました。他にも原爆の後遺症によりある一家が崩壊していく様子など以前の私だったらとつくに目をそらしているような写真を私はじっくり、一つも見逃さないように見ました。空調は効いているはずなのに、いつの間にか手は汗でベトベトでした。でも向きあわなければいけない。この気持ちを少しでも多くの人に伝えられるように。その一心で写真を見続けました。

私はあの一言に出会えてなかったらきっと原爆がもたらした悲惨さ、亡くなられた方、その家族の悲しみと願いに向きあえずにいたと思います。そして被爆体験者の川本さんがおっしゃった「あったことはあったこととして認め合い、二度とこのような悲劇をくりかえさないように。」という強い願いを理解することも、できなかつたと思います。ですが私はその思い、広島の人たちの悲しすぎるほどの願いを知ることができました。そして私はそれを、何としても伝えていかなければならないと強く決心しました。原爆の悲惨さ、亡くなられた方、その家族の想いやくやしき、そして願いを。これからの日本、そして世界のために私は、私のできることとは何かを常に考え続け、できることをがんばりたいと思います。

広島を訪れて

高綱中学校2年

久保原 心風

1945年、8月6日、午前8時15分に広島に原子爆弾が投下されました。この日を境に広島は一変したのです。

広島を訪れた初日、8月5日に被爆者の方、川本さんの話をお聞きしました。川本さんは当時の話をくわしく話してくれました。広島には当時、人口が35万人もの人がくらしていたそうです。その他にも、陸軍3万人、海軍2万人、工場地帯に1万人くらしていたそうです。そして原子爆弾によりおよそ6万人が亡くなりました。またみなさんもご存じでしょうが原子爆弾には、爆風、熱線と共に放射線が出ます。およそ6万人は爆風、熱線で亡くなりましたが、それを上まわるほどの人々が放射能により亡くなりました。それでも、20万人近くの人々がなんとか助かりました。その助かった人々は、体にいろいろな害がありながらも生きてきました。熱線で火傷を負い、それが治ったと思ったら、火傷の跡が盛り上がるケロイドになったり、熱線により、着物の柄が皮膚に焼きついた人もいました。熱線だけでなく、放射線により、発病したり、死亡する人もいました。また、爆発後、放射性物質を含んだチリやススなどが地表から巻き上げられ黒煙となり、空気中の水滴と混じり、黒い雨となって降りました。被爆した方々はのどが渇いてこの黒い雨を飲み、多くの人々はその後3ヶ月にもわたり下痢をした

そうです。そんな中、2,000人余りの人々が路上生活をし、多くの人々は餓死し、それでも生きようとした人は、新聞をも口にしたそうです。そうでもなきゃ生きられない環境だったのです。みなさんは想像できますか。僕は全然想像が付きませんでした。でも広島平和記念資料館に行ってよく分かりました。血のついた服、すわっていた人の影がうつっている影石、頭蓋骨が山のようにおかれている写真など当時の物がたくさんあり、ようやく、広島に原子爆弾が落とされたんだなと実感がわきました。

僕は、この3日間を通してたくさんの事を学びました。日本もアメリカも互いに自分が正しいと思ひ込みお互いに話し合いが出来ていなかった。だからこういう事が起きるのだ。そして、過去の事はふり返らず、今をどうするか考えなきゃいけない。そして、被爆者の方のこんな言葉をよくおぼえています。差別があるかぎり、平和にはならない。自分が出来ていると思っても周りに認めてもらわなければ意味がない。僕はまさしくそうだなと思いました。なのでこの言葉を忘れず、昔にこんなことがあったんだという事を後世に伝えていくことが大事だという事を学ぶ事が出来ました。

平和の為に

高綱中学校2年
新村 鈴花

1945年8月6日、1発の原子爆弾が投下されました。何が起きたのかわからない内に亡くなってしまった人が大勢いました。また、原爆のせいで後遺症や差別に苦しんでいる人も大勢います。私は広島で話を聞いたり見学をしたりして、改めて原爆について考えました。

私は8月5日に被爆者の方のお話を聞きました。74年前の8月6日に被爆した人々の中には服が肌にくっついてしまった人々がいました。その人達は、油をぬって服をはがしたそうです。原爆が投下されたのは8月だったけれど、治療が始まったのは11月でした。14万人近くの人が亡くなりました。また、広島的小学3～6年生の内8600人の人達が家族を失ったそうです。その内2000人近くの子供達が施設などに入れず、路上生活をしなくてはならなかったそうです。私が話を聞いた方も路上生活をしていて、草や新聞まで食べないと飢えをしのげず、苦しい毎日だったそうです。

広島にいた子供達は、原爆のせいで学校を卒業できず、就職できなかつた人達が大勢いました。そうした人達は、お金のある人から奪ったりケンカをしたりする毎日だったそうです。

私はそれらの話を聞いて、原爆が投下されて被爆した方々がいるのは知っていたけれど、その後どのように生きてきたかということを知らなかったことがわかりました。

また、私は原爆資料館で、被爆した人達やものを見てきました。火ぶくれして肌が垂れてしまっている人。死んでしまった母親の横で泣いている子供。人が座っていた影がついた石の階段。どの展示も原爆の悲惨さを物語っていました。私はこのとき、日本が非核三原則をかかげる理由が身にしみてわかりました。また、戦争をしてはいけないということも強く思いました。

私が今回話を聞いた方は、「アメリカを憎んでいますか。」という質問に「アメリカを憎んでいた。でも憎んでいるだけでは何も始まらない。起こってしまったことは起こってしまったこととして認めて、話し合い、歩み寄っていくことが大切だ。」と言っていました。私はこれを聞いて、この人はとてもひどかったマイナスの現実を、未来がよりよくなるようにプラスの活動をしていてすごいなと思いました。私も、マイナスなことでもあったことはあったこととして認め、これから自分がどうするべきなのか、どうしたら人々の為になるのかを考えて、プラスの行動をしていき、少しずつでも自分の周りから平和になるようにしていきたいです。

世界を平和にするために

菅野中学校2年

大月 佑太

ぼくは、8月5日、8月6日に松本市を代表して広島に行ってきました。平和記念式典や資料館、被爆者の方のお話を聞いて平和や戦争のことについて学習してきました。

広島に着いたら被爆者の方のお話を聞きました。まずは広島の当時のことについてくわしく説明してくれました。広島の当時の人口は35万人で、陸軍が3万人、海軍が2万人いたそうです。そして、1945年8月6日に広島に原爆が落とされました。その時、中心地の温度は3000度、2km地点の温度は1500度でした。今では想像もできないほどのことだなと思いました。その原爆で20万人近い人がやけどをしました。その人たちを治療するのに使ったのは油だったそうです。11月になるとやっとちゃんとした治療ができるようになりました。けれど12月になるとあわせて14万人の人がなくなってしまいました。8月6日に原爆が落ちたとき、救助にいった1万人の学生と2万人の兵隊たちは放射のうをあびてしまい後に障害が残ってしまいました。被爆者の方も放射のうをあびてしまったため、結婚することができなかつたりと辛い経験をしたそうです。このような話をしてくれた被爆者の方は最後に大事なことを教えてくれました。それは、自分のまわりにいじめや差別があれば平和とはいえないからいじめや差別のない社会を自分たちがつくっていくこと、自分のまわりの人たちを大切にするなど他にもいろいろなことを教えてくれました。普段なかなか被爆者の

方からお話を聞くことはできないので良い経験になりました。次に実際に原爆ドームを見学して、資料館を見学しました。資料館の見学では全身をやけどした人の写真や家族へ送った手紙などを見て改めて戦争のおそろしさを感じました。他にも被爆者の方の遺品も展示されていました。2日目の平和記念式典では安倍内閣総理大臣などのお話も聞くことができました。その平和記念式典に参加した後はバスで愛媛県の西予市に移動しました。西予市では宇和中学校の生徒の人と交流をしました。まず始めに開明学校で模擬授業を受けました。宇和中学校の代表の3人の生徒の人が授業をしてくれました。とてもおもしろい授業をしてくれたので楽しく授業を受けることができました。模擬授業を受けた後には宇和中学校の生徒の人が町の中を案内してくれて短い間だったけれどとても楽しく交流をすることができました。

広島での2日間の体験を通して戦争のおそろしさを改めて感じるすることができました。このことを次の世代の人に語り継いでいくことがぼくたちの役目だと思うのでまずはまわりの人へ今回の体験で学んだことを伝えていければいいなあとと思いました。

雲一つない広島で

菅野中学校2年

白井 乃々夏

「リトル・ボーイ」そう名付けられた一発の原子爆弾が74年前の8月6日、8時15分、雲一つない広島に投下されました。広島は一瞬にして焦土と化し、多くの人の命と未来を奪いました。

私はこの8月、菅野中学校の代表として広島を訪問し、広島平和記念式典への参加、平和記念資料館の見学、被爆体験者の講話などを通して戦争の恐ろしさや平和について学んできました。

広島に着いてすぐに被爆体験者の方のお話を聞きました。お話の中で一番心に残ったのは、放射線の恐ろしさです。爆心地周辺の温度は3,000度から4,000度にもたっっていたそうです。鉄が溶ける温度が1,500度ぐらいなので、町が一瞬にして焼け野原になってしまったのは当然です。爆心地から1.2キロメートル以内で熱線の直射を受けた人は皮膚が焼き尽くされ、目や内臓が飛び出し、そのほとんどの人が亡くなってしまいました。他にも町は血で染まった川、がれきの山、たくさんの亡骸で埋まり、地獄のような光景が広がっていたそうです。爆発後、広島には「黒い雨」が降りました。その雨には高濃度の放射性物質が含まれていました。暑くて暑くてどんな水でも飲みたかった人々は、口を大きく開けてその水を飲んだそうです。そのせいで多くの人が亡くなり、その後も後遺症に悩まされる人が大勢いたそうです。私はお話を聞きながら、怖くて悲しくて胸が苦しくなりました。

お話を聞いた後に訪れた資料館では、焦げた三輪車、焼け焦げた白飯が入ったままの弁当

箱などたくさんの被爆品や写真を見ました。どれも目を背けたくなるものばかりでしたが、一番恐ろしいと思ったのは、原爆の熱線によって腰かけていた人の影だけが残った石段を見た時です。その悲惨さに足が止まり動けなくなりました。その影がこんな惨禍を二度と繰り返してはいけないと訴えているようでした。

私は広島に行くまで「戦争」「平和」についてよくわかりませんでした。でもこの二日間の経験で戦争や原子爆弾の恐ろしさを知りました。被爆者の方の「食べられること、学べることは当たり前ではない。好き嫌いを言ったり、授業中にふざけてたりしないでほしい。私たちが平和をつくるために、話し合い、譲り合い、間違っていたらすぐに直して自分の進む道を決めてほしい。」という言葉に「平和」は身近なところにあることも知りました。私はこの経験を以前の私のようによく分からない人、関心のない人に伝えていきたいと思います。そして、みんなが笑顔で過ごせる毎日が続くように、私たちができることを積み重ねていきたいと思っています。

あれから74年がたち、私が広島に降り立った日も雲一つない青空でした。世界中の人と同じ空を見て「幸せだなあ」と思える未来に向けて平和について勉強し、これから生きていきたいと思っています。

消してはいけない悲しみ

筑摩野中学校2年

上條 奏夢

広島駅に着き、新幹線を降りると長野県よりも暑い空気が漂っていました。予想以上に近代化された街並みを見て、

「本当にかつてこの場所に原爆が落とされて焼け野原になったのだろうか。」

と感じました。終戦から70年以上も経っているので景色が変わるのは当然ですが、戦争があったことが信じられない自分がいました。

まず文化センターで被爆体験者の方のお話をお聴きしました。その方は、原爆が投下された時は、疎開されていて直接被曝されてはいないそうです。原爆投下後にお姉さんが迎えに来てくれて、しばらくは二人で一緒に駅のホームで暮らしていました。しかし、お姉さんは被爆の影響で亡くなってしまいました。その後は、お一人で生き抜いてこられたそうですが、生き抜いたことは、他の人を傷つけてきたという罪悪感をもっているとお聴きして、ショックを受けました。生きることが罪になるとはどういうことだろうと思いました。それは、食べ物を得るために、他の人から奪うこともあり、他人を蹴落としていたからだそうです。

もう一つ印象深いお話がありました。やがて大人になり、結婚を考えた女性がいたそうです。しかし、相手側のご両親から、

「原爆被害者と結婚して、その間に生まれた子が病気とかもっていたら困る。結婚は許さない。」

と厳しく反対されて、あきらめざるを得なかったという話です。

原爆は一瞬で多くの人々の命を奪いました。しかし、その後も生き抜いた人々の人生もまた原爆は奪っていたことを初めて知りました。

その後バスで市内を移動していると、視界に周囲と異なる雰囲気の入ってきました。それが原爆ドームでした。ビルが建ち並ぶ中から、急に姿を現したドーム。僕は、一瞬、息を飲みました。

バスを降り、間近でドームを見上げると、先程お聴きした方の話が頭の中に浮かんで来て、被害に遭われた方々の苦しみや悲しみの声が聞こえてくるようで、とても胸が苦しくなりました。

広島街が70年経った今でも、かつての大きな犠牲の上にあることを知りました。

次の日には、平和記念式典に参加させていただきました。今までTVで見たことがある式典に、実際に参加していることを自覚すると背筋がピンとしました。式典の最中は、昨日の方のお話と原爆ドームで感じたことがずっと頭の中を巡っていました。そして、この広島で感じた自分の気持ちや思いこそを、きっと他の人や自分の子ども達の世代に伝えていくことが必要なのだと思いました。消えない悲しみではなく、消してはいけない悲しみとして、未来へ語り継いでいこうと思いました。

命と歩む

筑摩野中学校2年

臼田 有貴子

今、生きているということは奇跡だと思う。
8月5日、私は14歳の誕生日に広島の地に初めて立った。原爆ドームを見て、何気ない毎日は、当たり前のことではないと知った。被害に遭われた方々は、突然の大きな痛みや悲しみに直面し、どれほど悔しく切ない思いだっただろう。

平和記念資料館では、本からは想像できなかった戦争の恐ろしさを数々の遺品が伝えていた。見れば見るほど、シャッターを押す手が震えた。あの日の事実を突きつけられ、どうしてこんなにもひどいことを…と、息を呑んだ。言葉を失い胸が痛かった。

静かに当時のまま建っている原爆ドームと、爆心地の島病院の上に広がる青空を見上げながら、私は今もこれからの時間も良くしていきたいと思った。

平和記念式典への参列者の人数に圧倒された。雨の降る中行われたが、それは私達の知る雨だった。あの日被爆した人々は、水を求めて放射能を含んだ黒い雨を飲んだという。想像をはるかに超える、考えられない過去が広島にあった。自分の目で見たことで、人々の命が計り知れないほど尊く、人は支え合わなければ生き続けられないと感じた。

私の曾祖父は広島で生まれ育ち、成人してからは東京で働いていた。曾祖父を育ててくれた養父母が眠るお墓は、74年前は原爆ドームの近くにあったということが、訪問前に分かった。今まで知らなかったことがたくさんあり、

不思議な縁を感じた。

被爆者講話でお聞きした、

「恨んでも、未来はなにも良くなるしない。」という言葉が印象的で胸に刺さった。あんなに残酷で悲しすぎる出来事を、二度と起こしてほしくない。繰り返したくない。そして、平和で優しさがあふれ、希望に満ちた未来にしたいという強い願いを感じた。

ご飯を食べたり水を飲んだり、友達と笑い合ったりすることが今までは普通に過ぎていた。しかし、松本に帰ってきたあと、当たり前の時間その一瞬一瞬をかみ締めるような気持ちが自分の中に生まれた。尊いことが私達の身近には数え切れなくらいある。だから、小さな幸せを広げてみんなの明るい気持ちにつなげたいと思う。

広島で言葉にできない感情を抱き、様々な光景が何を表しているのか深く考えた。

温かい心で、武器なんて使わないで、先人達が望まないことをせずに、恥じない生き方をしたい。原爆の被害に遭われた方、犠牲になられた方、多くの人々が残した消えない悲しみを、自分の中で大切に受け継いで過ごしていきたいという思いが芽生えた。今までこれほど心を揺さぶられることがあっただろうか。

守りたい大切な人がいる。誰もが互いを尊重することが力強く生きる道を切り開いていくと思う。

残したい思い

山辺中学校2年
小林 義明

僕は8月5、6、7日に平和記念式典に参加するために広島を訪れました。74年前にこの街がたった一つの原子爆弾によって焼け野原になってしまったとは思えないほど、今の広島は発展していました。

広島に着いてすぐ、被爆体験者の川本さんのお話を聞きました。川本さんは原爆投下時、小学6年生で、山の奥の寺に疎開していたそうです。そのため、直接の被害は受けませんでした。しかし、お母さんは全身に火傷を負い、一週間後に亡くなってしまったそうです。その後、お姉さんに引き取られましたが、放射性物質を含んだ黒い雨を浴びていたらしく、半年後に白血病で亡くなってしまいました。孤独となった川本さんは引き取り先がなくなり、路上生活になったそうです。毎日の食べ物に困り、新聞紙などを食べていたそうです。しかし、空腹と喉の渇きはおさまらなかったそうです。このときの苦痛と苦労は言葉では表せられないほど大変なことだったと思います。その後、学校に通えなかった川本さんは、会社に就職できず、生き抜くために人から物を奪って生活していたそうです。十数年後、川本さんはそれは悪いことだと考え直し、今までにあった事実を伝えていこうと思い、語り部として生きていこうと思ったそうです。戦争によって何もかも狂わされてしまい、ずっと苦しい日々だったのだなと思いました。

当時の様子を平和記念資料館で見ることができました。1945年8月6日に爆弾が落と

され、6,000度という想像を超えるほどの熱い火の玉が広島の上空に現れました。その熱が一瞬にして街を焼き、爆風はすべてを吹き飛ばしたそうです。

展示されていた写真には、顔中に細かいガラスが刺さった少女のものや、亡くなったたくさんの方々が地面に横たわっているもの、たくさんの方々の頭蓋骨が山のようにになっているものがありました。展示物には溶けたガラスの瓶、焦げた弁当箱、8時15分で止まった時計がありました。まるで「忘れないでくれ」と訴えているようでした。これらの写真や目の前にあるものを見て、過去に本当にあった恐ろしいことなのだと改めて感じました。

式典では日本人だけでなく、世界中から多くの方が参加していました。平和への思いがみんなの心の中にあるからだと思いました。あの日、あの時と同じ8時15分に黙祷が捧げられました。あのたった一発の原子爆弾で、何万という命が奪われ、今もなお、後遺症に苦しんでいる方もいると思うと、戦争は起こしてはいけないと強く思いました。

「今あるこの日常に感謝して、平和の大切さを守っていかなくてはいけない。」と、まずは身近な人に伝えていこうと思いました。

当たり前であることに感謝

山辺中学校2年

二木 瑠心

「今の生活を当たり前とっていてはダメ。感謝をしながら生きていくことが大切。」と、被爆体験者の川本さんは言っていました。

1945年8月6日午前8時15分に広島に一つの原爆が落とされました。そして、私は8月5、6、7日に同じ広島を訪れました。現在の広島は原爆が落とされたとは思えないほど、ビルが建ち並ぶなど発展していて驚きました。そんな中被爆体験者の川本さんからお話を聞きました。

原子爆弾は、地上から600メートルの高さで爆発し、中心は6,000℃だったそうです。そして被爆した方は、男女どちらか分からない状態で亡くなっていたそうです。20万人が火傷をしましたが、薬はなかったそうです。服が焼けていてはがそうとしたけれど痛がっていたため、服の上から油を塗ったそうです。機械油まで使ったそうです。もうこの方法しかなかったと言っていました。10月にはアメリカから薬をもらい、11月にケガをした人の手当てをしましたが、12月には14万人の人が亡くなってしまいました。42校の小学校があり、6,000人いましたが、4,000人の1・2年生が亡くなりました。3～6年生の児童は被爆していませんでしたが、帰る家がなかったそうです。そのような人たちは捨てられた新聞紙などを食べていたそうです。そして2,000人の人が餓死しました。数年が過ぎても放射能で細胞が破壊され、何人も亡くなってしまいました。そのせいで、川本さんも含めたくさんの方々は就職も結婚もできなかったそうです。ですが、川本さんのことを覚えてくれていた方

がいて、とてもうれしく思い、一時的に岡山に行っていましたが、今は広島に戻ってきたそうです。

また、川本さんは、「平和の始まりは差別がないこと。自分が信頼される人になる。二度と繰り返さないようにする。しっかりお互いに譲り合うことが大切。」とおっしゃっていました。私はこのお話を聞いて、原爆がどれほど恐ろしいものかということを実感しました。川本さんのように苦しい思いをした方がたくさんいると思うと、本当に切なく感じました。原爆ドームを見ても、その恐ろしさを感じました。

広島平和資料館には8時15分で止まった時計、焼け焦げた三輪車などが展示されており、原爆についてより詳しく学ぶことができました。

この3日間を通して、改めて原爆の恐ろしさを体験できました。原爆が投下されてから74年が経ちました。この出来事が二度と繰り返されないように、忘れないように、次の世代につなげていきたいです。今、私たちが生活を送ることができることは決して当たり前のことではありません。74年前、犠牲になってしまった方々のことを思い、今、生活を送ることができることに感謝しながら、一日一日を大切に生きていきたいです。

自分たちにできること。

開成中学校2年

田中 都夢

74年前の8月6日午前8時15分に、広島に一発の原子爆弾が投下されました。その原子爆弾は、その一瞬で、たくさんの人の命を奪いました。その中のほとんどの人が、「まだ生き残った」と思っていたでしょう。その人達はきっと、「いつかこの世界が平和になってほしい」と願っていたでしょう。

その思いは、今でもたくさんの人が抱えています。僕達が参加した、「広島平和記念式典」では、たくさんの国から、たくさんの人が訪れ、平和への願いをこめ、黙祷をささげていました。これは、たくさんの国の人達があの日を忘れず、これからの平和な世の中を築いていこうという皆の思いだと思います。

僕は、今回広島を訪問して、食べ、学ぶことのありがたさ、自分たちが原爆によって亡くなられた方の分まで、精一杯生きなければならぬということを感じました。

僕達は、あたりまえのように、1日3食を食べ、いろいろなことを学ぶことができます。ただ、それはあたりまえではなく、お父さん、お母さんが働いてかせいだお金や、たくさんの方の支えによってできていることで、決してあたりまえではありません。食べ、学ぶことに感謝をし、好き嫌いをせず、残さず食べて、自分から積極的に学び、多くのことを身につけて、立派な人間になれるようにしたいと感じました。

また、原爆によって亡くなられた方々は、ま

だ実現しなかったこと、成しとげたかった夢などがたくさんあったと思います。その方々の分まで、僕らが精一杯生きて、原爆で亡くなられた方々が、少しでも満足してくれるような世の中を築いていかなければならないということを感じました。

「平和」と一言と言っても、とても難しいと思います。僕は、皆がそれぞれに思い描いている「平和」が実現すれば、世界が平和になったと言えると思います。例えば、「いじめや差別が無い」というのも一つの平和だと思います。僕達はこの後、最近国宝に指定された「旧開智学校」の姉妹館である「開明学校」のある愛媛県西予市宇和町に行き、地元の「宇和中学校」の生徒さんと、町を散策をしました。そこは、古い町並みが残っていて、とてものどかでゆったりした雰囲気でした。きっとこんな雰囲気を感じられるのも、平和ということなんだと思いました。「世界の平和」というと大きいかもしれないけど、自分の身のまわりから、平和を広げて行けば、いつか「世界の平和」につながると思います。それがきっと、「自分たちにできること」なんじゃないかと思います。

核廃絶を願って

開成中学校2年

清水 友結

8月5日から7日の3日間、開成中の代表・松本市の代表として広島へ訪問し、広島平和記念式典に参加させていただきました。

そこで、原爆で被爆された方の、大変貴重なお話しをお聞きする事ができました。

今の私達より若い頃に被爆し、命は助かったものの、家族は次々に亡くなってしまった事。他の生きていた人々も、皮膚と服がくっついてしまい油を塗らないと取れず、何か月も手当てが出来ずに多くの方々が亡くなってしまった事。など悲惨な現実を知りました。

8月6日。あの晴れていて良い天気だった広島に何がおこったのか…。そのことを知っている人は、年々減ってきています。

被爆された方は、家族が亡くなった後に新聞紙を食べなければ生きていけなかった現実を必死に生きてきました。働き、人から物を奪わなければ生きてはいけなかったのです。成人して大人になっても、原爆投下の時広島にいた人達は、結婚も就職もできず孤独だったといいます。しかし、あの日広島にいた仲間からの一本の電話から、広島で起きた事を語り継いでいこうと決心されたと聞きました。仲間からの電話があったから、今の自分につながっている。とお話しされていたことが心に残りました。

昔の日本は、自分たちの国こそが正しい。という教育でした。アメリカやイギリスも同様に、自分たちの国が正しい。という状態で、お互い話し合うことが出来なかったようです。だからこそ、今はお互いに譲り合ってよく話し合

う事が大切になっていくと感じました。

「今の君達には、昔の人が出来なかった事ができる。」とお話しされました。今では当たり前前にできていることが、昔は当たり前前に出来なかった事を知り、食べる事。勉強すること。周りの人から認められる事。がいかにか大切か。両親に感謝する事の大切さ。など、私達の日常生活に関わるお話しも数多くお聞きする事ができました。

世界が平和になるためには、一気には無理ですが、自分の周りから平和をつくっていけばいいと教えていただきました。いじめや差別を無くし、助け合い、お互いがお互いを信頼する事で平和が生まれると思います。

今を生きていく私達が大切にしていかなければならないものは、「お〜い」と呼び掛けられる仲間をつくる事と、この先の未来をどう生きていくかを考える事だと思います。戦争で亡くなった多くの方のことを考え、語り継いでいく事も必要だと思います。このすべてを行う為に、戦争の悲惨さを伝え、戦争のない未来を。そして核兵器のない未来をつくっていくこと。その事こそが、これからの未来を担う私達の役目だと感じました。

原爆孤児の存在

女鳥羽中学校2年

野澤 卓矢

8月6日、僕らは広島にいました。とても賑やかで美しい街並みでした。でも74年前、この街に原子爆弾が落ち、約14万人もの命が奪われるという、辛い過去があったのです。

そして今回、被爆は免れたものの家や家族をなくし、その後亡くなってしまった、また、苦しみながら生きてきた、原爆孤児と呼ばれる子どもたちの存在も知りました。

お話を聞いた川本省三さんは、当時11歳の6年生で、三次市というところに、同じ学校の3～6年生とともに疎開していました。その頃広島市内はアメリカによる空襲が激しくなり、小学生はみな田舎に疎開していたそうです。しかし原爆によって、疎開先から帰って来た約2,700人が親を失い、孤児となりました。そのうち数百人は施設へと入ることができましたが、ほとんどの子は受け入れ先がなく、路上生活を強いられたそうです。とにかく食べるものが無かった、そういいます。それでもなんとか生きるために、落ちていた新聞を食べたり、石についた水滴を飲んだり…そんな状況がしばらく続いた後、ヤクザのお兄さんたちが市内へやってきました。それにより広島は、ケンカの街へと姿を変えることになります。欲しいものがあるのなら、持っている人を倒して奪う、賭け事をしてお金を稼ぐ…「今生きているということは、誰かを傷つけたということ。だから、その時の話はしたくない。」そういう人も、かつての仲間の中にはいるようです。

川本さんは、ある村の村長さんに引き取られ、その人の会社で働きました。20歳の時、その土地の青年団の代表となり、自分の家も

建ち、いよいよ結婚だと、青年団で出会った彼女の親のもとへあいさつに向かいました。しかしそこで、「あなたと結婚したら、放射能によって子供に障害が残る。」と断られてしまいます。本当にショックで、広島の街を去り、岡山駅で汽車を降りました。そこでうどん屋の「住み込み定員募集」の張り紙を見た時、亡き母の「お前はやればできる」という言葉を思い出し、ここでもう一度人生をやり直そうと決めたそうです。そして原爆投下後50年の慰霊祭で、当時の友達と会いました。しかし、200人いた同級生のうち、再会できたのはおよそ60人だったといえます。

このような原爆孤児についてのことは、状況がよく分かっておらず、原爆資料館でもほとんど紹介されていません。だからこそ、本当のことをよく知る川本さんの講話をお聞きできたのは本当に貴重なことだと感じたし、僕らが責任を持って次の世代へと伝えていかなくてはならない、そう強く思いました。世界でもう二度と核兵器が使われない、同じ悲しみを味わう人をこれ以上絶対に出さない、その強い気持ちを胸に、日本に生まれた者として、声を挙げ続けたいと思います。

平和の灯を消す為に私達出来る事。

女鳥羽中学校2年

矢羽 姫和

今から74年前、8月6日午前8時15分に広島市に「リトルボーイ」という名の原子爆弾が落とされた。

この出来事で広島の人当時に35万人のうち約14万人の人が12月中に亡くなった。被爆者の中には性別もわからない状態で発見された人もいたそうだ。治療するにも薬がなく、川も被災者で埋まっていて、服と皮膚がくっついていて服を脱がせようとしても痛がった為油で服と皮膚をはがしていたらしい。この作業が9月いっぱい続いた。

被爆者のうち8,600人が家や家族を亡くし、700人は施設に入ることが出来たが2,000人は捨てられて生活も出来ない状態になり、食事は新聞紙を食べていて餓死や凍死する人もいた。

がれきの下には腐っている遺体があってそれがとにかく臭かった。そんな時9月11日に「ピカドン」という名の台風が広島市を襲った。その台風で遺体が押し流され、放射線も無くなった。と話してくれたのは、被爆者の川本省三さんです。

川本さんは学歴が無く就職も出来ず、好きな女性が出来たのにその両親に「子供が障害を持って産まれてくるかもしれない。」と結婚を反対されたそうです。そして、ヤクザに仲間入りして沢山の人を倒して相手の持っている物を盗む。の繰り返しをしていたみたいです。厳しい生活の中「悪い事」と分かっているけど皆自分が死なない様に必死だったんじゃないのか

な?と思いました。

そして、川本さんは小さな会社の社長になりました。自分の存在なんて忘れられている。と思っていた中「帰ってこい。」と電話をくれた友人がいたらしく川本さんはそれが凄く嬉しかった。と話してくれました。

今、私が伝えた分だけでも原爆の恐ろしさに分かると思います。でも、74年前の広島市に実際に起こった事実なんです。

私達がどれだけ悲しんでも被爆者の方々の気持ちが軽くなるわけじゃない。でも、少なくとも当時起こった事実を私達が後世に伝えていく事は出来るはずです。

被爆者の方々が少なくなっていく中、今回の私達のように話を聞いた人から身近な人と…と輪を広げていけば未来・後世に過去に起きた恐ろしい事実を伝えられるはずです。

川本さんは「アメリカを今でも憎んでいる。でもお互い向き合っていこう。」と話していました。

そして今回の広島平和記念式典参加事業で大切な事を教わりました。

今、私達が生きている事やほしい物が手に入り、学べて、食べられる事が当たり前ではない。という事。そして、「自分の進む道を。」「周りの人から信頼される存在になれ。」という言葉をかけてくれました。

平和な世界へ

明善中学校2年

関 大翔

僕は、8月5、6日に世界で初めて原爆が投下された地、広島を訪れました。

僕は、被爆体験者の方からお話しをお聞きして、原爆の投下された中心はふつうに1,000度をこえているときいて、いまいち、よくわからなかったけど資料館へ行って写真を見たら、全身が真っ黒にやけどをしていてとてもおそろしかったし、お弁当ばこや、自転車を見て全てが、ぐにゃぐにゃになっていておどろきました。それに昔は、薬がなかったので、やけどをした体に油をぬって服をぬがせて、油をぬって包帯をまくなどのことをしてケガ人の手当をしていたそうです。

けれど原爆から逃げても沢山の子どもが路上で生活をしていて、食べ物もなくゆいっ食べれた物は、朝だれかがすてた新聞を水と一緒にのみこんでいる子どももいたけど、それでも、餓死していく子が沢山いたそうです。

そして被爆体験者の方のお話しの中には、今から74年前では、今のようないちのことが全くなくて、食事まんぞくにできず、学ぶこともできず、生活するための家そのあたり前のことが一つの原爆によって全てうばわれてしまうことがとってもおそろしいと僕は、すごく思いました。

けれど、74年前の原爆がもしもなかったら、今でもどこかの国できっと核兵器がつくられていたかもしれません。でも原爆が広島に投下されたから今、世界では核兵器を禁止することができていると思っています。

そして僕たちは今、あたり前の日常があります。食事をしっかりとれて、学ぶための、学校があり、生活するための家もあり、ほしい物を買ってもらえるということがあります。でもそのためには、毎日、暑い中、寒い中、家族のために働いてお金をかせいでくれる両親がいます。その両親には、しっかりと、感謝をして生活をしていけたらいいです。

最後に、今回広島で学んだことをまずは、家族にそして友達、学校中そして日本以外の人にも広島のことを伝えていきたいです。

核兵器の無い平和な世界へ

明善中学校2年

宮越 陽

私は、8月5、6日に世界で初めて原爆が落とされた地、広島に行きました。広島では被爆者の方のお話を聞いたり、資料館を訪れたり、広島平和記念式典に出席したりしました。広島に行く前は、メディアでしか広島について知る機会がなかったのですが、今回は、実際に目でみたり、感じる事が出来ました。また、行く前はまだ詳しい話は知りませんでした。ですが、この2日間を通して私の平和への思いは大きく変わりました。1日目は被爆者の方からお話をお聞きしました。当時の広島は今の広島からは想像できないほど全部焼けてしまっていたそうです。被爆した直後に高温で助ける事も出来なかったそうです。亡くなった人がくさったにおいや、人を焼くにおいで70年住めないと言われたそうです。また、家族をなくした子供は食べ物がなく草や捨てられた新聞を食べていたそうです。その話を聞いて私は今、私たちはとても幸せなんだと、実感しました。川本さんの最後の言葉で、今できることを大切にといわれた事が印象に残っています。「その時代にできなかった事も今はできる」といわれ自分を振り返る機会となりました。「当時は、話し合わずに力で戦っていた」とおっしゃっていました。けれどその戦いで何人も人がなくなりました。なので「力ではなく話し合う事で解決してほしい。」といわれ、話し合いをして両者が理解し合える社会をつくりたいと思いました。その後、原爆ドームと資料館を見学しました。原爆ドームは、爆心地から150mも離れてい

るのに、ほぼもう原型がわからなくなっていました。資料館では、原爆によって被害を受けた物が展示されていました。被爆して8時15分で止まっている時計、やぶけてしまっている服、熱でとけて型のくずれた瓶や、目のそむけなくなる写真で、人々の苦しみの光景が頭に浮かびあがりました。もう二度とこのような苦しみをおこさないためにも、核兵器などを、全て無くさなければいけないと、改めて思いました。2日目は、広島平和記念式典に参加しました。平和式典には、多くの人々が参加していました。中には、多くの外国人の姿が見られました。平和式典に多くの外国人の方に来て知ってもらう事で世界へ発信したり、つなげていけるのだと思いました。今回私はとても良い経験をしました。なので、私が今回学んだ事を無駄にせず最初は、周りの人から伝えていく事が大切だと思います。戦争は、一瞬で私たちの暮らしを破壊する事が出来ます。唯一の被爆国である日本が、世界の先頭に立って、核兵器をなくすことを、訴えるべきです。そして世界が、戦争のない平和になることを願っています。今回このような貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。私は一日、一日を大切に生きていこうと思います。

明日の平和

信明中学校2年

山崎 優太

僕達は、明日が来ることを普通だと思っている。明日は何をしようか、何を食べようか、などと考えている。74年前、広島で暮らしていた人達もそう考えていたことだろう。しかし、1945年8月6日午前8時15分。一瞬にして、その明日は奪われた。爆風、熱線、放射線を放ち、多くの人々が亡くなった。辛うじて生き残った人達も後遺症を負った人がほとんどだ。そして、今もなお、後遺症に苦しめられている人がいる。その日、一発の原子爆弾によって一つの街が消え、多くの人々の命が消えた。

今回、広島を訪れ、広島の活気を大いに感じることができた。高層ビルが立ち並びとても、生き生きとした街であった。原爆が投下された後、70年ほど草木が生えないと言われていた街には、青々とした草木が生い茂っていた。広島では、原爆投下後、数か月程たつと草木が芽生え始めたようだ。

世界には、まだ沢山の核兵器が存在している。核保有国の間で、核兵器廃絶への動きが強まっている。核兵器が存在する間、いつ自分や、人々の命が危険にさらされるかわからない。日本は、アメリカの核の傘で守られている。これは、とても難しい問題だと思う。

世界で、唯一の被爆国である日本として核の

廃絶は、大変喜ばしいことである。しかし、日本が核の傘の下にあることも事実である。この問題に対して立ち向かうのは、僕達だろう。

今回の広島訪問において、多くのことを学び、多くのことを感じる事ができた。それらを後世に伝え広げていくことが僕達の役目だと思う。被爆した方々の記憶を伝えなければならない。

僕は、被爆を体験された方の言葉がとても印象に残った。それは、「とにかく勉強をして、信頼される人間にならなくてはいけない。そして、何より大切なのは、話し合うということです。」という言葉です。この言葉を常に心に留めておきたいと思った。どんなに小さなことでも感謝して、どんなにおかしな問題が起きたとしても話し合い、理解し合う。そう決心させてくれた。

「あの日」を繰り返してはいけない。そして、犠牲になった人々を無駄にしてはならない。明日があると確信して生活できる未来を作っていきたいと思いました。

平和な世界の尊さ

信明中学校2年
土屋 星莉奈

私たちは、8月5、6、7日に松本市の代表として広島平和記念式典に参加させていただきました。そこで、平和の尊さを学びました。

一日目は、被爆体験者の方のお話を聞きました。74年前8月6日午前8時15分、原爆は一瞬にして広島の人々から全てを奪いました。爆心地は3,000度にもなり、熱線と爆風、放射線が広島を襲いました。熱線、爆風の影響でおよそ6万人が真っ黒になり、建物が崩壊しました。午後5時過ぎに火がおさまり、爆心地は死体でうまっていたそうです。けが人の手当てで服をぬがすために食用の油を使い、なくなったら機械用の油を使っていました。12月には14万人の命がなくなりました。その中の2万人は韓国人でした。亡くなった中には小学1、2年生がいました。3～6年生は、爆心地からかなり離れた場所にいたため、無事でしたが、帰る場所がなく路上生活をしていたそうです。食べる物がなくて、石をなめたり、新聞紙を食べて少しでも空腹に耐えていたようです。今では考えられません。放射能をふくんだ黒い雨が広い地域に降りました。放射線による影響で今でも苦しんでいる人はたくさんいます。生きていても苦しむ人がたくさんいたと思います。10年経った広島はケンカの町となり、食べ物を得るために人の物を奪っていました。そんな広島が嫌になり、広島を出て行ったそうです。そして、50年ぶりに広島に帰ってきて当時いた半分以下で、当時の事を覚えて

いる人がいません。これから先、忘れてはいけない広島で起きたことを伝える人がいなくなっています。私たちが広島で起きたことを伝えなければいけないと思いました。

二日目は、広島平和記念式典に参加させてもらいました。改めて平和とは何だろう、私にできることは何だろうと考えました。当時に比べるといろいろな物が発達、普及してあたりまえになっていることへ感謝することを忘れていたのではないかと思いました。自分が正しい、自分のことばかりで話し合うことを忘れていないか、そう思いました。自分のことばかりでは同じことを繰り返してしまうし、周りが見えていないと助けることもできないと考えました。いきなり世界平和を実現しようと思っても難しいと思うので、まずは、自分の周りから小さな平和をつくっていくことが大切だと思います。私は、74年経って事実を伝える人がいなくなってきた、戦争や原爆についてもっと多くの人に知っていてほしいと思います。なので、日頃から日本や世界に関心を持ち、私たちが伝えていきたいです。そして、平和な世界をつくっていきたいです。

人の心

会田中学校2年
大塚 宗汰

今から74年前の8月6日午前8時15分、広島に一発の原子爆弾が投下されました。その爆風と熱線、そして放射線により、その年のうちだけでも14万人もの尊い命が、人生が、奪われました。ここまではだれもが知っている広島に投下された原爆だと思います。しかし、原爆のおそろしさは爆風と熱線、放射線だけではないのです。

僕達は当時、家族の中で唯一原爆が投下された時、広島市内におらず命は助かったという方に話を聴きました。その方が語られた話は僕にとって衝撃的な内容でした。その方は原爆の投下によりたった一年で父、母、姉二人を亡くし、天涯孤独の身となってしまったのです。その後親戚の叔父さんに引き取られましたが、あまり良く思われず、いろんなところに住んでるうちに結婚も、相手の親から

「あん時、広島にいたもんはみんな放射能に汚染されている。」

と言われたり、入社を断られたりしたそうです。この方はこの時のことを

「わしが甘かった。」

とおっしゃっていましたが僕はそうは思いません。悪いのは差別する人とそれを楽観視している人なのです。

こんなにもおそろしい原爆。なぜこんな兵器が今もたくさん残り、いつでも使える状態にあるのでしょうか。原爆を投下する前まで戦争は

お互いに大砲を撃ったりしていました。しかし、それらによる攻撃でどれだけ優位に立てたとしても原爆が落とされれば戦争は負けです。なので、どの国も原爆をもつ国をおそれて戦争をしていないのです。その理由でアメリカや中国は核に関する条約などに調印しないのです。

しかし、そんな原爆に守られた平和は平和と言えるでしょうか。広島に行って原爆の被害を見てきた僕達だからこそいえます。

「そんな平和なんて平和ではない。」

と。

原爆を落とす者もそれを命令する者も、落とされ死ぬ者も苦しむ者も、皆同じ人間なのです。そして、だれかが苦しんでいる時、人は無意識に目を背けてしまいます。でも僕達人間にしかできないこともあります。人の命を奪うのも救うのも人間です。これから生きる僕達は決して人の命を奪う道を進むことはあってはなりません。僕達にはその責任があるはずです。平和を続けるために多くの人と共に努力していこうと思います。

無題

会田中学校2年
小永井 木瑤

「今の人達は、日々の暮らしに感謝が足りてないんじゃないかな。」そう、被爆体験者の方は、おっしゃっていました。私は、この言葉が脳裏に焼きついて離れません。

今から、74年前の8月6日午前8時15分。広島に一発の原子爆弾が投下されました。たった一つの爆弾が多くの人の命を奪いました。その広島を、私は平和学習のために訪れました。

実際に広島を訪れてみるとたくさんのビルが、立ち並び、緑も美しく、とても良い所でした。しかし、74年前は焼け野原になっていたと考えると、あらためて戦争が、およぼす恐怖を感じました。

私は、この平和学習で、言葉では表せない戦争の悲惨さを目、耳、体全体で感じました。とくに、被爆体験者の方のお話は、とても印象的でした。

その被爆体験者さんは、原子爆弾の投下により、両親と姉、大切な家族を失いました。当時の被爆体験者さんは幼く、働いて稼ぐことはできないので、盗みをしないと食べていくことはできなかったそうです。だから、被爆体験者さんは、言いました。

「今、生きているということは、誰かを傷つけたということ。」

この言葉が、私の胸に刺さりました。なぜなら、この言葉は私達にもあてはまることだからです。そもそも、今の私達の自由で平和な暮ら

しは、多くの人の犠牲によって、保たれて来たのです。それなのに、私達は感謝を忘れ、嫌いな食べ物は残し、新しいものばかりほしがり、まだ使えるものも、どんどん捨てています。

この言葉は、今の私達の暮らしが、どれほど自分勝手に、世界を悪い方向へと、導いているかを、教えてくれました。

しかし、今は、すべてのことに感謝して生活したいと思っても、いつの日にか、このことを忘れて、また感謝を疎かにしてしまうかもしれせん。それが、とても怖いことです。人間は、幸せな生活に慣れると、まだ足りないと思ひ込みそれ以上のものを欲しがります。自分が、十分な、暮らしをしていることも、知らないで。

そうならないために、この平和学習で、目で見つめた戦争の悲惨さや耳で聞いた被爆者の悲しみと訴えが強く体に残っている内に、やらなければいけないことがあります。それは、戦争について、もっと調べていくことです。戦争は、なぜ始まったのか、世界にはどれほどの核兵器が存在するのか。私は、まだ知らないことが、多くて戦争が本当は、どんなに危険なのか、理解できていません。だから、戦争に、ついて調べることで、私の戦争への考えが、より深めることができます。そしてそれを、周りに伝えていくことが、私達にできる、平和の広げ方だと思います。

「平和」へ向けて

安曇中学校2年
藤山 和宏

8月上旬、僕は広島へ行きました。最初はあまり乗り気ではなかったのですが、参加して良かったと今では思っています。

これまで「平和」について考える機会は何度もありました。学校の授業や日常で流れているニュースなど。その場、その時で「平和」について考えることはできても、どこか「当たり前」のように感じてしまう自分がいました。もちろん、「平和」であることにありがたみを感じていないわけではなかったのですが、「平和」ではない日常を経験したことがなかったのも、頭ではわかっているにもかかわらず真剣に向き合えていなかったのだと思います。

今回、様々なことを見聞きした中で、最も印象的だったのは「原爆ドーム」と平和記念資料館の「原子爆弾(リトルボーイ)」です。

「原爆ドーム」を見たとき、その姿に圧倒されました。これまで「平和」な日常を「当たり前」のように感じていた自分には衝撃的な出会いでした。その姿が物語っていることは「戦争の恐ろしさ」なのだと思います。あの姿を見て何も感じない人はいないと思います。僕のように一目見ただけで何かしらのメッセージを感じ取るはずです。今でも残されていることの意味は、僕のように日常の「平和」を「当たり前」だと思わないように、見た人々が「戦争」や「原子爆弾」について考えるきっかけを作るためなのだろうと思いました。

また、平和記念資料館で見た様々な物から「核兵器の恐ろしさ」を感じました。「原子爆弾(リトルボーイ)」は実際に広島に投下された物だと知り、この鉄に覆われた核兵器によって多くの人の命が奪われたという事実に驚くとともに、その悲惨さをまだ実感できない自分がいました。

しかし、資料館を巡っていく中で、実際に被爆された方が身に付けていた物や写真を目の当たりにして、核兵器がもたらす恐怖を強く実感しました。

僕が現在、何気なく過ごしているこの「平和」な日常は、悲惨な「戦争」や「多くの人の犠牲」によって生まれたものなのだと実感しました。

世界にはまだまだ多くの「核兵器」が存在するそうです。今回の学習を通してその恐ろしさを学んだ僕からすれば不思議で仕方ありません。「核兵器」をなくすことが「平和」に直結するかは分かりませんが、大きな一歩になることは間違いのないと思います。そのために僕たちのようにこれから未来を担う若い世代が、国の枠を超えて「平和」のための活動をしていかなくてはならないと思いました。

8月6日の恐怖

大野川中学校2年

齊藤 具海

僕は小学4年生の時に「はだしのゲン」というアニメを観て、原子爆弾を知りました。僕はその時、広島にどんなことが起こったのかもっと詳しく知りたかったので、広島に行きました。

広島に着いて、被爆体験者のかわもとしょうぞうさんの講話を聞きました。現在の2019年から74年前の1945年の8月6日、8時15分に広島に一発の原子爆弾が落とされ、一瞬で町が変わったそうです。かわもとさんは6年生の時に被爆されました。原子爆弾が爆発した時には、強烈な光、人をふきとばす爆風、焼きつくような熱風、放射線が一瞬で放出され、町には火傷をした人、「水を下さい」と助けを求める人などがいたそうです。のどが渴いた人は放射線を含んでいる黒い雨を飲んだそうです。かわもとさんが路上生活を始めた時には死臭、人を焼いたにおい、人の血のおいがしたそうです。そのときには食べるものもなく、新聞紙などを口にするしかなかったと聞いて、驚きました。食べ物がないので、盗みをすることもあり、ヤクザの言う事を聞いて食べ物を食べたり、人を倒して食料を得たこともあったようです。また、かわもとさんは英語を勉強して外国に行くのは「非国人だ。」と言われ、僕は戦争の時で、「日本の事を考えていない」と思われ、今では考えられないことだと思いました。

次に原爆ドームと広島平和記念資料館の見学に行きました。原爆ドームは爆心地から近い距離にあり、鉄筋コンクリートなので、原子爆弾から耐えていましたが、今にも崩れそうな感じでした。原爆ドームを見ると原子爆弾の恐ろしさが伝わってくる感じでかわもとさんが実際に見た光景が伝わってきました。

広島平和記念資料館では原子爆弾の投下後

の広島の様子、爆風、熱風、放射線などの様子が絵やジオラマで展示されていました。原子爆弾投下後の広島は焼けのほらになり、倒壊した家がほとんどでした。熱風は文字のとおりとても熱い風なので、当たるとケロイド状態になり、その悲惨な様子を描いた絵がありました。爆風でガラスの破片が飛んできて体にささっている写真もありました。放射線の被害として佐々木さんという2歳の女の子が被爆して、そのときの放射線で白血病になり、12歳で亡くなってしまったという話がありました。テレビでは伝えられなかったことも知れました。

二日目は、広島平和記念式典に参加しました。広島の小6年生2人と広島市長さんそして、安倍首相も平和について話しました。平和とは？を改めて考えました。いつも普通に生きていることが当たり前ではないということも感じました。

僕はこの三日間はとても大きな経験になったと思います。今回広島で学んだことを一人でも多くの人に伝えて、広島や長崎のような体験をさせてはいけないと思います。そして原子爆弾投下から74年も経っているので、被爆体験者の方が少なくなって伝えていく人がいなくなってきています。ですから、次は僕達が次の世代、その次の世代に戦争や原子爆弾の恐ろしさ悲惨さを伝えていく「伝承者」になることが必要だと考えます。今も世界中で様々な問題が起きていますが、将来、争いのない平和な世の中にしていきたいです。本当にこの三日間凄く平和について考えることができました。

世界中が平和な未来を願って

梓川中学校2年

飯田 歩夢

8月5日、6日、7日に、僕は初めて広島を訪れました。一発の原子爆弾がこの街を焼け野原に変えたあの日から、74年がたった日、僕はビルの建ち並んだ綺麗な街を見ました。しかし、確かにこの地に多くの人の命をうばった原子爆弾が落とされたのです。

僕たちは被爆体験者の方から、お話を聞きました。当時広島には35万人の人がいたそうです。そして、原爆が投下されました。6日間で6万人の方が亡くなったそうです。街は燃え、救助活動をするために来た人も、あつすぎて街に入ることが出来ず、救助活動がなかなか出来なかったそうです。20万人以上が火傷をし、中には火傷がひどくて皮膚に服がくっついてはがれなくなる人もいたそうです。そして、薬も無かったそうです。10月に入り、やっと薬が送られてきましたが、12月までに8万人の方が亡くなってしまったそうです。それからお姉さんと半年生活が出来たそうですが、半年後にお姉さんが白血病で亡くなってしまいました。就職も出来ず、食べ物も無いので、食べ物を持っている人を倒して食べ物をうばったそうです。当時は、そうしないと生きられなかったそうです。僕はこの話を聞いて、今、自分たちが当たり前だと思っていることは、決して当たり前では無いのだと、改めて感じました。今、僕たちは当たり前前に食べ物を口にしているけれど、当時は、やわらかく、口に出来る物として、道に落ちている新聞紙まで食べたそうです。今、僕たちが、深く意識せず当たり前だと感じている事のほとんどが、当時は、当たり前

では無かったのです。

被爆体験者の方の話を聞いた後、僕たちは平和記念公園へ行きました。そこには周りの景色とは明らかに違った、原爆ドームがありました。くずれたコンクリートから、さらに恐ろしさを感じました。そして、それから、平和記念資料館に行きました。そこには、原爆の恐ろしさを伝えるための展示品がたくさんありました。熱線によって溶けたビン、ボロボロになった服や三輪車など、話に聞いたことはあっても、全て初めて見る物でした。この平和記念資料館を訪れた全ての方は、原爆の恐ろしさを感じるだろうと思いました。

二日目に、平和記念式典に参加しました。僕は、広島の小学生の「平和への誓い」が心に残りました。広島は本当に大人から子どもまで深く平和について考えているのだと感じました。

僕はこの二日間で、戦争、平和について深く考えることが出来ました。「戦争の無い平和な世界を作る」それは難しいことだけど、少しずつ自分の周りから、小さな平和をつくり、世界の平和につなげていくことは出来ると思います。一人一人がこの事を考えるようになれば「戦争の無い平和な世界」へ大きく近づけると思います。

小さな平和から前へ

梓川中学校2年
山下 小雪木

令和元年8月5日、6日に広島平和記念式典参加事業に参加をしました。

電車やバスの車窓から見る広島の町、自分の背丈から見る広島の町。今現在ととてもにぎやかなこの町に74年前一発の原子爆弾が投下された。たった一発だけの爆弾が数えきれないほどの人から笑顔をうばいました。

原子爆弾を投下後、人々は家や家族を失った。平和資料館で当時の実際の写真や原爆の影響でとけたガラスのビンなどの実物を見て、たくさんの人が苦しめられていたのだということを実感しました。

バス中ではバスガイドさんが広島の町や歴史について話してくれました。その中でも印象に残っているのが被爆列車です。この被爆列車は、原爆を投下されてからわずか3日後に焼野原となった広島の町を走っていました。この被爆列車は74年たった今も広島の町を走り続けています。これは、とてもすごいことです。被爆列車は生まれ変わった広島の町を走りながら戦争の悲惨さを伝えていっているのだと思います。

広島平和記念式典でいろいろな人が話をする中で私が印象に残っている言葉は、広島の小學生が言った「私たちは、この広島の町が大好きです。」という言葉です。一見は単純な言葉

に聞こえます。しかし当時の人たちも広島の町が大好きだったでも、一瞬で大好きな物がこわされる。それはとても、つらいことです。そこで、私たちは、今、自分の町を愛することができる。自分の町をたくさん愛して生活をしていこうと思いました。

今回の広島平和記念式典参加事業の中の被爆者の方の講話で被爆者の方は話し合うことが大切だということをおっしゃっていました。話し合いをして戦いをなくしていく。まず自分の周りから平和にしていくことが大切です。被爆当時は食べる物がなく、人々が捨てていく新聞を食べて死んでいく人々もいました。外国の勉強をすることも許されなかった当時のことを今になって考えると、自分はとても幸せ者なんだということを感じました。毎日食べるあたたくておいしいご飯、嫌いになるくらいにすることができる勉強このことをあたり前だと思わずに生活をおくっていきたいと思いました。少しずつでも小さくても平和が増えてほしいと感じました。

無題

波田中学校2年
野村 風雅

2019年、僕は初めて広島を訪れました。初めて見た広島の地は、所せましと建物が建ち並び、人々の活気、生気に満ちあふれていました。74年前この地に原子爆弾がおとされたとは思えない光景が広がっていました。

広島駅から移動した僕たちは、被爆者の川本さんの講話をお聞きすることができました。川本さんは当時爆心地から遠くはなれた寺に疎開していたそうです。3日後、川本さんのお姉さんが迎えに来てくれたそうです。広島の爆心地に近い家に帰ると、路上にはたくさんの死体があり、ケガをおった人を軍の人が手当てをしていたそうです。手当てをするには、服を脱がなければなりません。しかし服を脱がすと皮ふと服がくっついていて脱げないので、体に油をぬって服を脱がしていたそうです。こうして12月までには当時の広島の人のおよそ35万人のうち、およそ14万人の方が亡くなったそうです。悲劇は更に続き、生き残った人を待ちうけていたのは飢えとの戦いでした。特に被害をうけたのは、原爆で親をなくし、原爆孤児となった子供達だそうです。路上生活を余儀なくされたそうです。食べ物がなくなり、路上に捨てられた新聞紙を水にひたして食べたり、石をなめたりして飢えをしのいだそうです。しかしこのようなことで飢えをしのげるはずはなくおよそ2,000人の尊い命が奪われたそうです。

川本さんはその後被爆者と言うだけで結婚、就職も断られたそうです。物を持っている人から物を奪うためにケンカもし、広島はケンカの町とも呼ばれるようになったそうです。そんな川本さんは、自分の身の周りからいじめ、差別をなくしていくことが平和への第一歩だと言っていました。このことをいつも頭に入れて生活していきたいです。

その後僕達は、原爆ドームに向かいましました。原爆ドームは、原子爆弾の恐ろしさを語っていました。ひしゃげたらせん階段、溶けた鉄、元々の広島産業奨励館とは似つかない形でした。これは広島平和記念公園内にあります。広島平和記念公園内には他にも世の中から核兵器が亡くなるまで燃え続ける平和の灯や、原爆死没者慰霊碑などがあります。その内の広島平和記念資料館内には、原爆投下当時の写真など目を覆いたくなるような物もありました。

2日目は、8月6日。平和記念式典に出席しました。そこには安倍首相をはじめ日本を代表する人達ばかりでした。74年前のこの日世界ではじめてこの地に一発の原子爆弾が投下されました。たった一発ですがその一発が多くの人々の生活、人生を変えてしまいました。このことは同じ日本人として、地球で暮らしている人として、忘れてはいけな、忘れられてはいけな、式典に参加していました。式典でしか感じられない空気を感じました。その後四国の愛媛県に向かいました。そこでは西予市の宇和中学校の3年生の皆さんと交流をしました。このようなことができるのは「平和」だからだと思いました。

この3日間を通して、僕は改めて平和の尊さを感じました。しかし言うだけでは世の中は平和にはならないと思います。そこで大切だと思うのは、ゆずり合い、話し合うことだと思います。二度と戦争をおこさないために、平和な世の中を作るために身近な所から「平和」を作っていきたいです。

無題

波田中学校2年
星野 優希

私は8月6日、広島平和記念日を挟んだ3日間、広島と松本市旧開智学校と姉妹館提携、平和都市宣言をしている西予市を訪れました。「昔と違い、やりたい事が自由に選択できる今の一つ一つに感謝し、自分の身近な所から平和にしていってほしい」と心に大きな傷を負った上で世界平和を願う被爆体験者の講話を聞いた後に行った平和記念公園、平和記念資料館が一番心に残りました。資料館には、目を覆いたくなる当時の被爆した人々の写真、原爆の熱さで変形したガラスのビン、溶けた大仏、原爆投下という一瞬で変わり果ててしまった様々な物が展示してありました。中でも、沸とうしてドロドロに溶けた屋根瓦を見た時、どれだけ熱かったのだろうと想像もつかない思いにただただ驚くばかりでした。その中で私はある折りづるに目を止めました。その折りづるは直径1センチほどで、美しい紙で折られ、いくつも散りばめられていました。「禎子さんが折ったつる」とありました。禎子さんは2才の時に被爆し、11才で白血病になり12才で亡くなりました。入院中の病院で折りづるを千羽折れば元気になると信じて折り続け、生前1300羽以上折った、とも言われています。折りづるの紙は、けして質の良いものではなく、薬の包み紙など大きさも様々で小さなものでしたが、私はとても美しい折りづるに見えました。平和記念公園にある原爆の子の像は禎子さんの通っていた学校のクラスメイトが募金活動をして建てられたものだそうです。

「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和を きづくための」とい

うクラスメイトの思いが石に刻んでありました。病気になっても一生懸命生きようとした禎子さんの思いを周りの友達が繋いで一致団結して建てられた像へ波田中学校全員で平和の思いを込めて作った千羽づるを献納してきました。他にもたくさんの折りづるが献納されており、多くの方々が平和を願っているということを実感しました。資料館最後の方は「あの一瞬がもたらした悲しみや苦しみ、不安や絶望。穏やかな夕日に、幸せなひとときに、それらは突然影を落とします。消えることのない心の痛みを抱いて被爆者や遺族はその後の人生を歩みました。」と、原爆投下後を力強く生きていく人達の写真の展示、説明になりました。夫婦で子供を抱きかかえ、笑顔で写っている「我が子を抱いて」という1枚の写真に生きる力や勇気をもらいました。被爆してケロイド治療のため入院した二人が出会い、結婚し翌年に子供が生まれた写真です。緊張の中、思わず私もほっとして笑顔になりました。この笑顔のために平和であることの尊さに今、気づかなくてはいけないと思いました。私達が生きている今、今日という日は戦争や原爆で罪もなく亡くなっていった人達が生きたかった未来です。平和の願いと共に力強く生きていこうと思います。

「伝えられていない現実」

鉢盛中学校2年

籠田 渉

僕は、8月5・6・7日に行われた松本市広島平和記念式典への参加及び第16回西予市交流事業に、松本市の中学生を代表して行ってきました。

僕が一番伝えたい事は、平和記念資料館では見られない現実がたくさんある事です。広島について一番初めに被爆体験者の川本先生のお話を聞きました。その方の話は世間に伝えられている歴史もありましたが、伝えられていない事が多くありました。それは疎開していた子供達の生活や亡くなってしまった人の話です。僕が初めに衝撃を受けたのは、アメリカが投下した原子爆弾でアメリカ人が12人ほど死んでしまった事です。その現実を知って本当に原子爆弾は無差別に投下されたのだと思いました。守らなければならない同じ国の人も殺してしまったのです。

二つ目に衝撃を受けたのは疎開していて助かった人達の暮らしの厳しさです。生き残った人達の暮らしは、焼け野原になった広島に戻っても、もちろん家はなくなって、帰る場所がありませんでした。子供達は路上で生活をしていて食べる物もなく朝サラリーマンが捨てた新聞紙を食べ、新聞紙が無い時は道に落ちている石を舐めて生きていたそうです。しかし皆が生き続ける事はできず、2,000人近くの方が餓死してしまったのです。路上生活をしている子供達のところに、他の県からヤクザが入って来て面倒を見てくれたそうです。面倒と言っても、欲しい物は持っている人を襲い、奪い取っていました。今生きている被爆者の方々

は、この様なとても厳しい暮らしを乗り越えて生き抜いた人達なのです。原爆が投下されてから50年経って、同級生に広島に帰って来いと言われたそうです。その時はとても嬉しかったそうです。しかし実際帰ってきた人は200人中60人だったそうです。

僕は二日間の体験を通して、今の生活が当たり前ではない事、本当はできる事をやりたくないという感情だけで避けている事はとてももったいない事だと思いました。川本先生の話聞いて思ったのは、今は自分の学びたい事を自由に学べる時代なのに、その権利を持っているのに学ぼうとしない事は、とても勿体ないと思いました。他にも大きく友達の輪を広げていく事や、普段から気軽に声を掛けられる人をつくる事、原爆の事や昔の事だけではなく、常に未来や明日の事を話し合う事がとても大切だと思いました。一番強く思ったのは自分の生き方だけを主張するのではなく、周りの意見を聞かなければ平和な世の中にはならない事です。これからはもっと周りの意見を聞き、いろんな考えを取り入れていきたいと思います。

西予市交流事業では、昔ほどの様に勉強をしていたか、どんな思いで勉強していたかなど、歴史を知る事ができ、有意義な時間を過ごす事ができました。

これからを考える

鉢盛中学校2年

濱 涼夏

私は、8月5日と6日に原爆が世界で初めて落とされた地、広島を訪問しました。人々がたくさんいて活気に満ちていました。74年前の8月6日までは、このような景色が広がっていたのだと思います。

しかし、原爆により全てが失われてしまいました。それまで当たり前にしてきた街や家族が熱線や放射能により奪われてしまったのです。

私は被爆した川本さんに話をきく機会をいただきました。川本さんは11歳、小学6年生の時に被爆したそうです。川本さんは生き残りましたが、亡くなられた方はとても多くいらっしゃいます。爆心地から500メートル四方にいた方は3,000度の熱線でとかされ亡くなりました。そこから少しはなれた所でも20万人は火傷やその他の放射能の影響で亡くなりました。その年の12月には14万人が亡くなったと言っていました。私はその事実におどろきと怒り、かなしみが一気に押し寄せました。なぜ、何の関係もない人間が殺されなければならないのか、子どもは親を失うことはどういうことなのかと思いました。

私は、話をきく中で、「周りの人間を大切にしろ」、「何かあった時、助けてもらえるだけの人間になれ」という言葉が印象的でした。私は周りを大切にしているつもりでしたが、改めてそう思いました。ですが、全国的に見るとどう

でしょう。いじめや差別で亡くなっていく人だって何人も何人もいます。私は今回の経験で、原爆はもちろん絶対なくすことも大切だと思いましたが、それと同じくらい「いじめや差別をなくす」と言うことが大切だと感じました。いじめはなくさなくてはならない、他人事と思っってはいけない、自分はちがうとは思ってはいけないのです。周りから平和にしていかななくては、世界平和にはつながっていきません。周りを大切にしましょう。そこから始めましょう。平和につなげましょう。二日目に行った西予市の宇和中学校の方々は、皆が分けへだてなく楽しく笑っていました。いいなあと思いました。きっと全員仲が良く、全員で協力して、私たちのために準備してくれたのだと思います。宇和中学校の方々は平和を無意識にでも達成しているように思いました。

私たちは今、平和に暮らせているのでしょうか。本当の平和とは何なのでしょう。今の生活は当たり前なのでしょうか。私はそうは思いません。「話し合う、ゆずり合う」という事を大切にして過ごしていき、平和を伝える人になれるようにしていこうと今回の経験を通し、思いました。

「平和」とは何だろうか

信大附属松本中学校2年

久保田 興輝

「平和とは何なのか」、「今は平和なのだろうか」これは参加者説明会の松本ユース平和ネットワーク出前事業で訊かれたことです。僕は、この時、「平和」という漠然としたものに対してははっきりとどういうものか説明できませんでした。でも、今回広島のパネル記念式典に参加したり、被爆体験者の方の話の話を聞いたりして、「平和」ということについて考えを深められたと思います。

今回僕たちは、被爆者の川本さんから、お話を伺いました。そこで川本さんは「今はごはんが食べられる、学べる、その“普通”を考えてほしい」、「まず、自分のまわりから平和を、はじめや差別があると絶対に平和にならない、だから自分から平和を」「自分たちで未来を作ってもらいたい、自分の進んでいく道を見つけてほしい、だから互いに話して支え合って」と言っていました。僕は、これを聞いて、平和は、世界で戦いがなくなるというようなとても大きな平和でなくても、自分たちの周りからでも、相手のことを考え、自分本位とせずには的確な判断をしていけば良いのかなと感じました。また、相手のことを考えていくことを、多くの人がやっていけば大きな平和につながっていくと思いました。次に、原爆ドーム、平和記念資料館へ行きました。原爆ドームは、いつもはあまり見ないけど、注意深く見てみると、鉄骨が曲がっていたり、外壁が崩れていたりして、爆発の凄まじさを物語っていました。資料

館へ入っていくと、写真や、遺品、被爆者の方が描いた、当時の様子の絵がありました。爆心地付近の物品は、説明があっても何か分からない程にぐちゃぐちゃになっていました。また、写真では、全身に火傷を負った人や、自分と年がさほど変わらないような少年の写真があり、これが市内の至る所で起こっていたと思うと、本当に多くの人が苦しい思いをしたんだなと思いました。また、絵を見ていても、当時、記者や写真家が入っていない投下直後の惨状が刻銘に描かれていて、絵でも目をそむけたいような衝撃を受けました。また、川本さんのお話とも重なる部分があり、とても怖く思えました。

次の日、8月6日の平和記念式典では、黙とうと、平和宣言、平和への誓いなどを聞きました。黙とうは、原爆が投下された8時15分に合わせてします。その時僕は、74年前の“今”原爆が炸裂し、多くの人が亡くなった、今ここが原爆に吞まれていったとは想像できないし当時の人たちもそうだったのかなと思いました。

今回の体験を通して僕は、平和とは何かや、戦争の悲惨さを学びました。僕は、紛争とか、国と国のことについては、どうにもできないかもしれないけど、自分の周りから「平和」を繋いでいこうと思いました。

「平和のために」

信大附属松本中学校2年

音琴 光里

1945年、8月6日、8時15分。アメリカが落ととしていった原子爆弾は、一瞬にして街を焼け野原に、そして多くの方の命をうばっていきました。

その広島に着いてから被爆体験者の方の講話を聞きました。10歳の時に被爆された方に、原爆が落とされた時、その中心近くには普通に生活をしている人、陸軍に入っている人、小学校1・2年生、外国人など様々な人が生活をしてきたことを聞きました。その日常を原爆は灰にしました。中心から半径500m以内では3,000度にもなり、建物の中にいる人を助けようにも中に入れない状況だったそうです。その日に亡くなった方は6万人でしたが、その後も多くの苦しみを残していきました。放射線もその一つです。今も後遺症に苦しんでいる方がいます。また、親を亡くし、孤児になった人がたくさんいました。この子供達は大きくなってからも大変だったそうです。被爆者ということだけで結婚ができず、小学校すら卒業していないので就職も困難で苦しい生活が続いていきました。被爆体験者の方々はこのような体験から、一時期は人から物をうばって生活してしまったこともあったそうです。自分が語っているのは突然原爆によってうばわれたことを思い出しながら言うのは苦しいけれど、ほとんどの人が知らないからこそ伝えていきたいという気持ちがよく伝わり、原爆が及ぼしていたものの大きさを改めて感じました。

資料館では、多くの悲惨な資料を見ました。

たくさんの被害を受けた方々の写真、ぼろぼろになってしまった服、階段に残った人の影。どれも原爆のおそろしさを物語っていました。また、佐々木禎子さんという2歳で被爆した人が成長してから白血病になった時に折った折りづるもありました。本当は千羽のつるを折れば病気が治ると聞いて、折っていたのですが、千羽、すべて折り終わる前に亡くなってしまいました。この話から全国で千羽づるを折るようになったそうです。禎子さんの友達がつくった原爆の子の像の周りには千羽づるをかけることのできる場所があります。そこには数えきれないほどの千羽づるがありました。私は、禎子さんの思いが千羽づるによって受けつがれていると感じました。

今回広島に行って、平和とは戦争がないこと、戦争で被害をうけた人が周りの人と同じ生活ができること、みんな平等であることだと感じました。しかし、戦争でどんな被害を受けた人がいるのかをよく知らない人は私達の世代では多くいると思います。実際、私は孤児になってしまった人のことまでは知りませんでした。私は、今回知ったことを周りの人や後世に伝えていかなければいけないと思います。そして、私の周りから原爆のない平和を作っていきたいです。

繰返しませぬから

才教学園中学校2年

塩原 遼大

一瞬にして、全く罪のない多くの人々の尊い命と未来が奪われてから、74年がたちました。74年という歳月を経ても、未だに核は廃絶されていません。僕は日本人として、この問題に真剣に向き合う機会を与えていただいたことに感謝しています。

平和記念公園を訪れた際、中央にある原爆慰霊碑の中の石棺の碑文にすいよせられました(原爆慰霊碑の中の石棺には、原爆犠牲者の名前を記した過去帳が納められており、今現在31万9186人の名前が記入されています)。石棺の正面に刻まれた「安らかに眠ってください 過ちは繰返しませぬから」という碑文。原子爆弾を落としたのは日本ではなくアメリカです。それならば、「過ちを繰返させませぬから」という文がふさわしいのではないかと事前学習の時は、思っていました。しかし、原爆資料館を見学し、被爆者の方のお話を聞くにしたがい、自分なりに解釈ができました。「させない」という人に依存するような姿勢では核廃絶は到底、実現させることはできない。だから、自分たちから過ちを繰り返させないのだという強い決意を表しているのだと。

被爆者の方がおっしゃっていた「原爆を落としたアメリカを、今更恨んでも仕方がない」という言葉が印象に残っています。あれだけひどい目にあわされた方が、その思いに至るまでにはどれほどの苦悩の日々があったことでしょうか。それを乗り越えて、終わったことを言っても仕方がない、これからのことを考えていくのだという前向きな姿勢には感動さえ覚えました。原子爆弾については様々なメディアで報道されてきました。が、資料館で僕が実際に目にした、山積みされた骸骨や全身焼けただれた人々の痛々しい写真、焼け焦げて溶けた三輪車などは、想像を絶するものでした。まさに「百

聞は一見にしかず」です。原子爆弾に対するイメージが僕の中でガラリと変わりました。これほど恐ろしいものだったとは…。被爆者の平均年齢が82歳を超えた今、この悲惨な体験を伝え、核廃絶を訴えていくのは、僕たちしかないと思います。小さな事かもしれませんが、まずは学校の友人たちに、今回、僕が見たこと感じたことを伝えたいと思います。

この研修では、交流事業で訪問した愛媛県西予市で、宇和中学校の生徒さんから明治時代の模擬授業を受ける機会がありました。当時のテストや単語図は特に興味深いものでした。街の散策では、風情のある古き良き時代を感じることができ、西予の方々を羨ましく思いました。江戸時代にタイムスリップしたかのような街並みは奈良井宿を彷彿とさせ、親近感を覚えました。

最後になりますが、今回、他校の参加者の方々と交流できたことも、とても良い勉強になりました。最初はどう接すればよいのか戸惑いましたが、すぐ打ち解けて、学校の友達と同じくらい仲良くなることが出来ました。初めての体験を共有することにより、意見交換もでき、より見聞を深めることにもつながりました。良い仲間恵まれたことに感謝しています。

暑さと雨交じりの式典、しまなみ海道…。それらとともに、胸に刻み込まれた貴重な体験の数々を、これからの生活に活かしていきたいと思えます。

平和な未来のために

才教学園中学校2年

前田 心春

今から74年前の8月6日午前8時15分、広島に原子爆弾が投下されました。当時、広島に住んでいた35万人の人々の誰が、一瞬にしてこんなにも多くの命を奪われてしまうことを想像したでしょうか。

この広島への訪問は、私にとって戦争や原爆の被害や悲惨さ、そしてこれから私達が戦争のことを風化させないためにはどうすればいいのか、また、今の平和な生活について考え、平和についての関心を高める機会となりました。

私達は広島に行って1日目に平和記念資料館に行く機会をいただきました。行く前から、原爆投下当時の人々の持ち物、身に付けていた物が展示されている事は知っていたし、目を背けたくなるような生々しい物があることを頭に入れた上で、絶対にそれらの物から目をそらさない覚悟を持ってこの訪問へ臨みました。しかし、実際に資料館の中で目にしたのは、想像を絶するようなものばかりでした。熱線によって黒焦げになった家具、熱によってぐにゃぐにゃに曲がってしまった鉄製のお弁当箱や自転車、びりびりになった洋服…。それらは私達に、原爆の威力や恐ろしさをまざまざと見せつけ、平和への叫びを訴えかけてきました。また、資料館の中には「原爆の子の像」を建ててるきっかけとなった佐々木禎子さんが闘病中に折っ

ていたという折り鶴が飾られていました。一つ一つがすごく丁寧に折ってあり、「絶対に治したい、元気になって生きたい」といった気持ちが私にもひしひしと伝わってきました。原爆によって、生きたくても生きられなかった子供たちがいたということ学びました。それと共に、私達はその子供たちの分まで一生懸命生きていかなければという使命感にかられました。

また同じ日に、被爆体験者の川本さんに、被爆当時のお話、そして被爆者として歩んだその後の人生についてもお話をうかがいました。川本さんは11歳の時に被爆し、その時に見た広島町の変わり果てた姿や、その後の人生の中で差別を受けた経験など、過去にあった現実を後世に伝えていくために語り部になったそうです。今、被爆者の平均年齢は82歳を超え、私達は戦争体験者の方々の生の声を聞ける最後の世代と言われています。私達が次世代に伝えていかなければ戦争の記憶は次第に風化されていき、いつかは誰も戦争のことをよく知らない、という時代がきてしまうかもしれません。先の戦争の惨禍を知らなければ、仮に戦争が起きて止めようとも思わず、それどころかこの唯一の被爆国、日本が戦争に巻き込まれてしまう未来もあるかもしれません。私達には今回広島で学んできたことをまずは周りの家族

や学校の友達に伝え、それをたくさんの人に広めていく使命があると思います。

そもそもなぜ、広島に原爆は落とされたのでしょうか。広島にいた人達は、何の罪も無い人だったはずです。しかし、当時の日本が戦争をするという選択をし、それをやめよう、止めようとしなかったせいで何も悪いことをしていない多くの日本国民が戦争の恐怖にさらされました。当時の日本にも、戦争をやめてほしいと思っていた人はいたと思います。しかし当時の日本では、一人一人の発言の自由などなく、個人の気持ち・意見などは、全く反映してもらうことができませんでした。でも今は、自分の気持ちをためらわずに発信していくことができます。せっかく自由に自分の気持ちが発信していける環境があるので、未来を担う私達は今の世の中に目を向け、色々な事に興味を持ちながら日々生活していかなければと思いました。また、今、私には自由に勉強させてもらえる環境があります。このような環境が当たり前だと思わず、周りに感謝をしながら、貪欲にたくさんの事を吸収しながら大人になり、私達の手で自由で平和な世界を作っていきたいです。

原爆と平和

松本秀峰中等教育学校2年

千葉 快智

今から74年前の8月6日、午前8時15分、アメリカから飛行機が来て一発の原子爆弾「リトルボーイ」をヒロシマに投下しました。「リトルボーイ」は一瞬にして多くの人の命、未来、夢を奪いました。

僕は8月5日から7日まで、世界で初めての被爆都市である広島市に行きました。僕は今回初めて広島に行きました。原爆が投下された当時広島には今後70年人が住めないだろうと言われていたそうですが、今は74年前に原子爆弾が落ちたと思えないほど活気がありました。

広島で見学した原爆資料館には原爆投下後の街の様子や被爆による急性原爆症で苦しんでいる人、死体、骨などの写真がありました。また、実際に被爆した三輪車、お弁当、制服もありました。その中に少し黒ずんでいる石がありました。その石は原爆が炸裂した時座っていた人が爆発の風と熱で影になりそれが焼きついたものでした。それらのものはとても生々しく、原爆の強さ、残酷さを物語っていました。

また、僕たちは被爆体験者の一人である川本さんの話を聞くことができました。川本さんは11歳の時に被爆しました。父と妹は行方がわからなくなってしまい、姉と一緒に半年後まで暮らしていたそうです。しかし、姉は白血病で

亡くなってしまいます。広島に落とされた原爆「リトルボーイ」は爆心地から半径2キロ圏内を1500℃、500メートル圏内を3000℃の熱線にさらしました。火が強すぎて街にも入れず、救助活動もままならなかったそうです。しばらくして街に入ると、街中には多くの死体と火傷をした人がいました。中には強い熱線で体に服がくっついてしまった人もいたそうです。そんな人たちには油を塗って服を剥がしていました。しかし、その油も足りなくなり、つらい状況が続いたそうです。10月になると米軍からの薬と食料が届き、11月にはやっと治療ができるようになりました。また、広島の小学3年生、4年生だった子供たちは当時学童疎開をしていました。そのため広島にいた家族を亡くした子供たちは戦災孤児になってしまいました。子供達は捨てられた新聞を濡らして食べて、飢えをしのいでいたそうです。しかし、そうした子供達の記録は原爆資料館にはありませんでした。さらに川本さんなどの被爆者の方は後遺症がなくても当時被爆地にいたというだけで結婚、就職を断られてしまうことがあったそうです。川本さんもそのうちの一人でした。「被爆者に対する差別」によって広島では仕事にも就けなかったため、岡山に行き、なんとか仕事を得て、生活することができました。

60歳の時、友達の誘いもあり、ようやく故郷の広島に帰ることができたのですが、本当に嬉しかったそうです。

原爆は、恐ろしい兵器です。人々を殺傷し、街を破壊するだけでなく、その後の社会をも差別や憎しみでねじまげてしまう。なんとか生きることができた被爆者の方にお話を伺うことができて、あまり広くは知られていない広島の裏側も知ることができました。川本さんは広島が被爆した当時はできなかったからこそ、食べられること学べることは当たり前ではないと、このことをこれから私たちが真剣に考えていかななくてはならないとおっしゃっていました。広島に行く前に事前学習として平和について話し合った時には、核兵器を根絶する、戦争をしないなどの意見がたくさん出ていました。僕もそのように考えていました。しかし、原爆を体験した川本さんが話してくれたのは、世界を平和にするには自分の周りから平和にすることがたいせつであり、そのために普段から仲間と理解し合い、助け合うことができる環境を整えておく必要があるということでした。

今回の旅で僕たちは多くのことを学び、感じることができました。今の僕は、ともすれば今日と変わらず明日が来る毎日を当たり前と感じ、食べられること、勉強できること、友達と遊べることへの感謝を忘れがちな日々を送っています。今回学んだことを忘れずに、これから僕は毎日を真剣に過ごし、自分の価値を高め

周りから信頼される大人になるために今何ができるのかを考えて生活していきたいと思います。

「あたりまえ」をいつまでも

松本秀峰中等教育学校2年

宮本 梓菜

今、私たちは、食べられることや勉強が
できること、楽しい日々を過ごすことが「あたり
まえ」となっている。また、将来の夢があつたり
と、自分の未来について考えることが出来てい
る。

これは、74年前の8月6日に広島で過ごし
ていた人にも言えることだろう。しかし、8時
15分、広島にいた人の夢は、一発の原子爆弾
によって壊された。多くの人がなくなった。街
が消滅した。生き延びた人は、今もまだ、原子
爆弾による放射能の影響に苦しんでいる。

被爆者の方々は、二度と原子爆弾が使われな
いように、と「核廃絶」を強く願っている。し
かし、2019年8月2日にアメリカとロシア
における軍縮条約の一つであった「中距離核戦
力全廃条約」が正式失効となってしまった。こ
れは「非核化」を遠ざけることであり、被爆者
の方々の強い願いに反しているものだと私は
考える。

被爆者の方は、「当時の日本とアメリカ、そ
の他の多くの国々は、自分の国や味方の国だけ
が正しいと思っていた。この考えが、話し合う
ことや譲り合うといった解決方法を見出せな
いようにしていた。」とおっしゃっていた。し
っかりと話し合うことや譲り合っていくこと
は、日常生活における些細な問題点の解決にも

繋がっていくだろう。また、「核廃絶」に向け
て、積極的な話し合いと意見交換をしていけば
いつか実現するだろう。「平和」に繋がってい
くのではないかと私は考える。

現在、被爆者の平均年齢が82歳と、高齢化
が急速に進んでいる。再び原子爆弾が投下され
ないように、被爆者の方々の生の声を伝えてい
くのは、若い世代の私たちとなりつつある。今
回、広島での研修で多くのことを学び、そして、
肌で感じる事が出来た。これらを一人でも多
くの人に伝えていくことが私たちの使命なの
だと思う。被爆者の方々の記憶、強い思いを後
世に伝えていかなければならない。

原子爆弾の投下から74年が過ぎた今、広島
の街には綺麗な川があり、緑も多くなってい
る。また、高層ビルがいくつも立ち並んでいて、
活気がある。そして、地方中枢都市というとて
つもなく大きな役目を果たしている。この街で
は100万人を超える多くの人が、毎日を楽し
く過ごしている。それはもう、「あたりまえ」
なのだ。このような「あたりまえ」がいつまで
も続く未来を創りたい。

写真記録

1 8月5日(月)

被爆体験者講話



原爆ドーム見学



折鶴献呈



原爆の子の像



原爆死没者慰霊碑 (広島平和都市記念碑)



平和記念資料館見学



2 8月6日(火)

広島平和記念式典



西予市宇和中学校の皆さんとの交流





平和へのメッセージ

平和は人間にしか作れない。広島で強くそう思いました。平和記念資料館に行き、数え切れない悲しみの大きさを目の当たりにして、愕然としました。胸が痛く、切なくなり、怖かった。恐ろしかった。被爆した方々の言葉にできない絶望を感じました。原爆ドームは、その全てを無言のうちに語っているようでした。

あの日から74年経った広島には、たくさんの方が訪れていました。今、平和記念公園には多くの千羽鶴が飾られ、川が穏やかに流れ、風が優しく吹き、人々の祈りや思いが集まる場所だと感じました。世界中の人が平和を望んでいるはずです。皆さんの考える平和とはどのようなことですか。

被爆者の方からは、家族を亡くし、孤児になり、新聞紙まで口にしなければは飢えをしのげないほどの苦しい生活の中で、自暴自棄になってしまい、そんな自分にいらだちを感じたことなどのお話をお聞きしました。あの日8時15分に投下された一発の原爆から、苦しみの連鎖の中を生きてこなくてはならなかったそうです。しかし、亡き母の「お前ならできる。途中であきらめなければ可以的。」という言葉に支えられ、投げ出さずに生き抜いてきたともおっしゃっていました。当たり前の日常が、一瞬にして奪われ、その後もずっと苦しませ続けた悲劇を二度と繰り返してはいけなると強く感じました。

過去に悲惨な戦争があったという事実は、変えることのできない厳然たるものですが、今を生きる私たちにできることは多くあるはずで。被爆された方、亡くなられた方、あの日が無ければ、戦争が無ければ、どのような人生を歩まれたのでしょうか。魂の声に耳を傾け、向き合うことで、74年経った今でも、そして、これからも決して消してはいけな悲しみを後世に伝えていくことができると思っています。

そして、何より二度と戦争を起こさないことこそが、私たちに課せられた使命です。未来を生きる私たちに、戦争の犠牲となった全ての方々の思いが託されています。

○僕は周りから信頼され、支え合い、それぞれの道を悔いなく進める未来にしたい。

○私は間違いを認め、力強く生きたいと思える未来にしたい。

きっと誰しもが、心の中に良心をもっているはずで。一人の力は小さくとも、世界中の人々が手を取り合って、思いを寄せあえば、未来に明るい希望が灯されるはずで。広島で教えていただいた「今ある日常が当たり前ではない」ということを私たち一人ひとりが常に意識していくことで、生き方が変わり、誰もが安心して生活できる平和に満ちた時代を創れるはずで。

○あの日を忘れず、身近な人や命を大切にしていけることを誓います。

令和元年（2019年）8月15日

広島平和記念式典参加者代表

松本市立筑摩野中学校2年

臼田 有貴子

上條 奏夢

平和への誓い

私たちは、広島町が大好きです。
ゆったりと流れる川、美しい自然、
「おかえり。」と声をかけてくれる地域の人、
どんなときでも前を向いて生きる人々。
広島には、私たちの大切なものがあふれています。

昭和20年（1945年）8月6日。
あの日から、血で染まった川、がれきの山、皮膚がはがれた人、たくさんの亡骸、
見たくなくても目に飛び込んでくる、地獄のような光景が広がったのです。
大好きな町の「悲惨な過去」です。
被爆者は語ります。「戦争は忘れることのできない特別なもの」だと。

私たちは、大切なものを奪われた被爆者の魂の叫びを受け止め、
次の世代や世界中の人たちに伝え続けたい。
「悲惨な過去」を「悲惨な過去」のままで終わらせないために。
二度と戦争をおこさない未来にするために。

国や文化や歴史、
違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。
みんなの「大切」を守りたい。

「ありがとう。」や「ごめんね。」の言葉で認め合い許し合うこと、
寄り添い、助け合うこと、
相手を知り、違いを理解しようと努力すること。
自分の周りを平和にすることは、私たち子どもにもできることです。

大好きな広島に学ぶ私たちは、
互いに思いを伝え合い、相手の立場に立って考えます。
意志をもって学び続けます。
被爆者の思いに、私たちの思いを重ねて、平和への思いを世界につなげます。

令和元年（2019年）8月6日

こども代表 広島市立落合小学校 6年 金田 秋佳
広島市立矢野小学校 6年 石橋 忠大

平和宣言

今世界では自国第一主義が台頭し、国家間の排他的、対立的な動きが緊張関係を高め、核兵器廃絶への動きも停滞しています。このような世界情勢を、皆さんはどう受け止めますか。二度の世界大戦を経験した私たちの先輩が、決して戦争を起こさない理想の世界を目指し、国際的な協調体制の構築を誓ったことを、私たちは今一度思い出し、人類の存続に向け、理想の世界を目指す必要があるのではないのでしょうか。

特に、次代を担う戦争を知らない若い人にこのことを訴えたい。そして、そのためにも1945年8月6日を体験した被爆者の声を聴いてほしいのです。

当時5歳だった女性は、こんな歌を詠んでいます。

「おかつぱの頭(づ)から流るる血しぶきに 妹抱(いだ)きて母は阿修羅(あしゅら)に」

また、「男女の区別さえ出来ない人々が、衣類は焼けただれて裸同然。髪の毛も無く、目玉は飛び出て、唇も耳も引きちぎられたような人、顔面の皮膚も垂れ下がり、全身、血まみれの人、人。」という惨状を18歳で体験した男性は、「絶対にあのようなことを後世の人たちに体験させてはならない。私たちのこの苦痛は、もう私たちだけでよい。」と訴えています。

生き延びたものの心身に深刻な傷を負い続ける被爆者のこうした訴えが皆さんに届いていますか。

「一人の人間の力は小さく弱くても、一人一人が平和を望むことで、戦争を起こそうとする力を食い止めることができると信じています。」という当時15歳だった女性の信条を単なる願いに終わらせてよいのでしょうか。

世界に目を向けると、一人の力は小さくても、多くの人々が結集すれば願いが実現するという事例がたくさんあります。インドの独立は、その事例の一つであり、独立に貢献したガンジーは辛く厳しい体験を経て、こんな言葉を残しています。

「不寛容はそれ自体が暴力の一形態であり、真の民主的精神の成長を妨げるものです。」

現状に背を向けることなく、平和で持続可能な世界を実現していくためには、私たち一人一人が立場や主張の違いを互いに乗り越え、理想を目指し共に努力するという「寛容」の心を持たなければなりません。

そのためには、未来を担う若い人たちが、原爆や戦争を単なる過去の出来事と捉えず、また、被爆者や平和な世界を目指す人たちの声や努力を自らのものとして、たゆむことなく前進していくことが重要となります。

そして、世界中の為政者は、市民社会が目指す理想に向けて、共に前進しなければなりません。そのためにも被爆地を訪れ、被爆者の声を聴き、平和記念資料館、追悼平和祈念館で犠牲者や遺族一人一人の人生に向き合っていたいただきたい。

また、かつて核競争が激化し緊張状態が高まった際に、米ソの両核大国の間で「理性」の発露と対話によって、核軍縮に舵(かじ)を切った勇気ある先輩がいたということを思い起こしていただきたい。

今、広島市は、約7,800の平和首長会議の加盟都市と一緒に、広く市民社会に「ヒロシマの心」を共有してもらうことにより、核廃絶に向かう為政者の行動を後押しする環境づくりに力を入れています。世界中の為政者には、核不拡散条約第6条に定められている核軍縮の誠実交渉義務を果たすとともに、核兵器のない世界への一里塚となる核兵器禁止条約の発効を求める市民社会の思いに応えていただきたい。

こうした中、日本政府には唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約への署名・批准を求める被爆者の思いをしっかりと受け止めていただきたい。その上で、日本国憲法の平和主義を体現するためにも、核兵器のない世界の実現に更に一步踏み込んでリーダーシップを発揮していただきたい。また、平均年齢が82歳を超えた被爆者を始め、心身に悪影響を及ぼす放射線により生活面で様々な苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めます。

本日、被爆74周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和元年（2019年）8月6日

広島市長 松井 一實

旅の日程

	時 間	項 目	備 考
8 月 5 日 (月)	7:40	松本駅東西自由通路へ集合	受付
	7:55	出発式	
	8:36~10:52	松本駅 ⇒ 名古屋駅	しなの4号
	11:21~13:38	名古屋駅⇒ 広島駅	のぞみ163号 (車内で昼食)
	13:38~14:00	広島駅 ⇒ RCC文化センター	バス
	14:00~15:00	川本 省三さん 被爆体験者講話	
	15:00~15:30	広島平和記念公園へ移動	バス
	15:30~17:30	原爆ドーム、平和記念資料館等見学	徒歩 折鶴献呈
	17:30~18:00	ホテルへ移動	バス
	18:00頃	安芸グランドホテル着	
18:30~	夕食(安芸グランドホテル)		
6 日 (火)	6:40~	宿舎発	
	6:40~7:30	広島平和記念式典会場へ移動	バス (車内で朝食)
	7:30~ 8:45	広島平和記念式典	
	8:45~15:00	西予市へ移動 (昼食:せとうち茶屋大三島)	バス
	15:00~18:00	交流事業(模擬授業、散策等)	開明学校他
	18:00頃	松屋旅館着	
	18:30~	夕食(松屋旅館)	
7 日 (水)	7:00~	朝食(松屋旅館)	
	8:15~13:20	松屋旅館 ⇒ 岡山駅 (昼食:琴平)	バス
	13:53~15:31	岡山駅 ⇒ 名古屋駅	のぞみ28号
	16:00~18:04	名古屋駅 ⇒ 松本駅	しなの19号
	18:15	解散式(松本駅東西自由通路)	

参加者一覧

参加生徒

学校名	氏 名	
清水中学校	はやし ゆうだい 林 優大	うるしはた はな 漆 畑 葉奈
鎌田中学校	そうま けんご 相馬 健吾	こばやし そな 小林 奏和
丸ノ内中学校	あさわ けい 浅輪 慶	まるやま ほのか 丸山 穂乃香
旭町中学校	きのした たいしゅう 木下 泰秀	しのだ あきこ 篠田 昭子
松島中学校	ひらた たろう 平田 太朗	おざわ こうめ 小澤 小梅
高綱中学校	くぼはら みなぎ 久保原 心風	にいむら すずか 新村 鈴花
菅野中学校	おおつき ゆうた 大月 佑太	しらい ののか 白井 乃々夏
筑摩野中学校	かみじょう かなむ 上 條 奏夢	うすだ ゆきこ 臼田 有貴子
山辺中学校	こばやし よしあき 小林 義明	ふたつぎ るこ 二木 瑠心
開成中学校	たなか ひろむ 田中 都夢	しみず ゆい 清水 友結
女鳥羽中学校	のざわ たくや 野澤 卓矢	やば ひより 矢羽 姫和
明善中学校	せき ひろと 關 大翔	みやこし ひより 宮越 陽
信明中学校	やまざき ゆうた 山崎 優太	つちや せりな 土屋 星莉奈
会田中学校	おおつか そうた 大塚 宗汰	こながい こだま 小永井 木瑠
安曇中学校	ふじやま かずひろ 藤山 和宏	
大野川中学校	さいとう ともみ 斉藤 具海	
梓川中学校	いいだ あゆむ 飯田 歩夢	やました こゆき 山下 小雪木
波田中学校	のむら ふうが 野村 風雅	ほしの ゆうき 星野 優希
鉢盛中学校	かごた わたる 籠田 渉	はま すずか 濱 涼夏
信大付属松本中学校	くぼた こうき 久保田 興輝	おとごし ひかり 音琴 光里
才教学園中学校	しおはら りょうた 塩原 遼大	まえだ こはる 前田 心春
松本秀峰中等教育学校	ちば かいち 千葉 快智	みやもと あずな 宮本 梓菜

事務局

所属	役職等	氏名
行政管理課（文書館）	課 長（団 長）	せきざわ さとし 関沢 聡
博 物 館	係 長	つちや まつえ 土屋 まつえ
筑摩野中学校	教 諭	たかまつ ようこ 高松 陽子
清 水 中 学 校	教 諭	たかの たつみ 鷹野 巽
平 和 推 進 課	主 事	みやた やすし 宮田 泰志

松本市中央図書館平和資料コーナー常設図書一覧表 一般図書・郷土資料

書名	著者	出版社
あゝ祖国よ恋人よ	上原 良司／著	上原 清子
アジアの声 第9集		大阪：東方出版
あの日、広島と長崎で	平和博物館を創る会／編	東京：平和のアトリエ
アメリカの中のヒロシマ 上	R・J・リフトン／[著]	東京：岩波書店
アメリカの中のヒロシマ 下	R・J・リフトン／[著]	東京：岩波書店
アメリカひじき・火垂るの墓	野坂 昭如／著	新潮社
アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか	ロナルド・タカキ／著	東京：草思社
アメリカは有罪だった 上	エドワード・セント・ジョン／著	東京：朝日新聞社
アメリカは有罪だった 下	エドワード・セント・ジョン／著	東京：朝日新聞社
アメリカ人が伝えるヒロシマ	スティーブン・リーパー／著	東京：岩波書店
歩いて見てほしいひろしま原爆の木たち	大川 悦生／著	京都：たかの書房
医師たちのヒロシマ	核戦争防止・核兵器廃絶を訴える京都医師の会「医師たちのヒロシマ」刊行委員会／編	京都：機関紙共同出版
碑に誓う	江口 保／著	東研出版
遺品は語る	森下 一徹／写真	汐文社
いま国連、改憲論を問う	非核の政府を求める会／編	京都：かもがわ出版
OKINAWA イントロダクション・沖縄	室井 美稚子／編著	三友社出版
沖縄 戦跡が語る悲惨	真鍋 禎男／著	沖縄文化社
オマールさんを訪ねる旅	早川 幸生／編	京都：かもがわ出版
終わりなき旅	井出 孫六／著	東京：岩波書店
核時代に生きる私たち	マヤ・モリオカ・トデスキーニ／編	東京：時事通信社
核時代の科学者たち	パリティ編集委員会／編	東京：丸善
核戦争シミュレーション	前田 哲男／著	東京：筑摩書房
核戦争の危機と人類の生存	江口 朴郎／[ほか]編	東京：三省堂
核なき未来へ	森川 聖詩／著	東京：現代書館
核の時代を読む	剣持 一巳／著	東京：平凡社
核の世紀末	高木 仁三郎／著	東京：農山漁村文化協会
核廃絶へのメッセージ	土山 秀夫／著	東京：日本ブックエース
核分裂を発見した人	シャルロツテ・ケルナー／著	東京：晶文社
核兵器のない世界へ	ジョセフ・ロートブラット／[ほか]編著	京都：かもがわ出版

核兵器廃絶への道	朝日新聞大阪本社「核」取材班／著	東京：朝日新聞社
核抑止か核廃絶か	非核の政府を求める会／編	東京：大月書店
核兵器と人間の鎖	岩波書店編集部／編	岩波書店
核兵器廃絶のうねり	岩垂 弘／著	連合出版
京都に原爆を投下せよ	吉田 守男／著	東京：角川書店
記憶の光景・十人のヒロシマ	江成 常夫／著	東京：新潮社
キノコ雲に追われて	ロバート・トランブル／著	東京：あすなろ書房
希望のヒロシマ	平岡 敬／著	東京：岩波書店
禁じられた原爆体験	堀場 清子／著	東京：岩波書店
玉砕・テニアン警備隊	中村 春一／著	青森：北の街社
黒い雨	井伏 鱒二／著	東京：新潮社
消された秘密戦研究所	木下 健蔵／著	長野：信濃毎日新聞社
原子爆弾	編集部／編	東京：翔泳社
原子爆弾	武井 武夫／[ほか]共著	東京：光陽出版社
原子爆弾	ジム・バゴット／著	東京：作品社
原子爆弾の誕生 上	リチャード・ローズ／[著]	東京：紀伊國屋書店
原子爆弾の誕生 下	リチャード・ローズ／[著]	東京：紀伊國屋書店
原爆	石井 光太／著	東京：集英社
原爆を子どもにどう語るか	横川 嘉範／著	東京：高文研
原爆をつくった科学者たち	J. ウィルソン／編	東京：岩波書店
原爆を盗んだ男	ノーマン・モス／著	東京：朝日新聞社
原爆をみつめる	飯島 宗一／編	岩波書店
原爆が消した広島	田邊 雅章／著	東京：文藝春秋
原爆奇譚	高橋 五郎／著	東京：学研パブリッシング
原爆供養塔	堀川 恵子／著	東京：文藝春秋
原爆災害ヒロシマ・ナガサキ	広島市・長崎市原爆災害誌編集委員 ／編	岩波書店
原爆神話の五〇年	斉藤 道雄／著	東京：中央公論社
原爆児童文学を読む	水田 九八二郎／著	東京：三一書房
原爆と朝鮮戦争を生き延びた孤児	吾郷 修司／著	東京：新日本出版社
原爆投下・10秒の衝撃	NHK 広島「核・平和」プロジェクト ／著	東京：日本放送出版協会
原爆投下とトルーマン	J. サミュエル・ウォーカー／著	東京：彩流社
原爆投下の経緯	奥住 喜重／訳	大阪：東方出版
原爆投下報告書	奥住 喜重／[ほか]訳	大阪：東方出版
原爆投下は予告されていた!	黒木 雄司／著	東京：光人社
原爆ドーム		広島平和文化センター

原爆ドーム	穎原 澄子／著	東京：吉川弘文館
原爆ドーム物語	汐文社編集部／編	東京：汐文社
原爆に夫を奪われて	神田 三亀男／編	岩波書店
原爆に託されたメッセージ	岩崎 四郎／著	東京：近代文芸社
原爆の絵	広島平和記念資料館／編	東京：岩波書店
原爆の記憶	奥田 博子／著	東京：慶應義塾大学出版会
原爆の記憶を継承する実践	深谷 直弘／著	東京：新曜社
原爆の子 上	長田 新／編	岩波書店
原爆の子 下	長田 新／編	岩波書店
原爆の世紀を生きて	米澤 鐵志／著	京都：アジェンダ・プロジェクト
原爆被爆記録写真集	長崎市／編	長崎国際文化会館
原爆被爆者三世代の証言	澤田 愛子／著	大阪：創元社
原爆被爆者の半世紀	伊東 壮／[著]	東京：岩波書店
原爆文献を読む	水田 九八二郎／著	東京：中央公論社
原爆はこうして開発された	山崎 正勝／編著	東京：青木書店
原爆は日本人には使っていない	岡井 敏／著	東京：早稲田出版
原爆句抄	松尾 あつゆき／著	東京：新樹社
原爆詩一八一人集	長津 功三良／編	東京：コールサック社
原爆症	郷地 秀夫／著	京都：かもがわ出版
原爆碑を洗う中学生	小林 文男／[著]	東京：草の根出版会
原発と核のない国ニュージーランド	ギル・ハンリー／ほか著	東京：明石書店
高校生の平和ハンドブック 3	高校生平和ゼミナール全国連絡センター／編	東京：平和文化
高校生の平和ハンドブック	森田 俊男／（他）編著	平和文化
広野に夢はせて	矢澤 れい／著	長野：ほおずき書籍
子どもとつくる平和の教室	小藺 崇明／編著	東京：はるか書房
子どもたちへ原爆を語りつぐ本 総集版	広島市こども図書館／編	広島市こども図書館
子どもたちへ原爆を語りつぐ本 1985	広島市こども図書館／編	広島市こども図書館
さくら隊8月6日	新藤 兼人／[著]	東京：岩波書店
されど天界は変わらず	東京大学理学部天文学教室OB／編	龍鳳書房
死の灰を越えて	飯塚 利弘／著	京都：かもがわ出版
証言 第12集(1998)	長崎の証言の会／編集	長崎：長崎の証言の会
証言 第13集(1999)	長崎の証言の会／編集	長崎：長崎の証言の会

知られざる原発被曝労働	藤田 祐幸/[著]	東京：岩波書店
資料所在調査結果報告書（Ⅱ）	平和祈念事業特別基金/編	平和祈念事業特別基金
資料所在調査結果報告書（別冊）	平和祈念事業特別基金/編	平和祈念事業特別基金
新聞資料原爆 [1]		東京：日本図書センター
新聞資料原爆 2		東京：日本図書センター
新編原爆詩集	峠 三吉/著	東京：青木書店
図録 広島を世界に	広島平和記念資料館/編	広島平和記念資料館
世界を不幸にする原爆カード	金子 敦郎/著	東京：明石書店
戦中・戦後の暮らしの記録		東京：暮らしの手帖社
太平洋の非核化構想	豊田 利幸/[ほか]編著	東京：岩波書店
立ち上がるヒロシマ 1952	岩波書店編集部/編	東京：岩波書店
朝鮮人・琉球人帰国関係資料集	山根 昌子/編	新幹社
沈黙のヒロシマ	仲川 文江/著	京都：文理閣
天王山 上	ジョージ・ファイファー/著	東京：早川書房
天王山 下	ジョージ・ファイファー/著	東京：早川書房
凍土の碑	陳野 守正/著	教育報道社
届かなかった手紙	大平 一枝/著	東京：KADOKAWA
ドキュメンタリー原爆遺跡	広島高校生平和ゼミナール/[ほか]編	東京：平和文化
ドキュメント真珠湾の日	佐々木 隆爾/[ほか]編集	東京：大月書店
ナガサキ 新版	長崎総合科学大学平和文化研究所/編	岩波書店
ナガサキ消えたもう一つの「原爆ドーム」	高瀬 毅/著	東京：平凡社
長崎原爆写真集	反核・写真運動/監修	東京：勉誠出版
長崎原爆資料館関係資料		長崎市
ながさき原爆の記録	長崎市/編	長崎市
長崎原爆の記録	泰山 弘道/著	[東京]：東京図書出版会
長崎<11:02>1945年8月9日	東松 照明/著	東京：新潮社
ナガサキ-1945年8月9日	長崎総合科学大学平和文化研究所/編	東京：岩波書店
長崎の痕(きずあと)	大石 芳野/著	東京：藤原書店
ナガサキの平和学	長崎総合科学大学長崎平和文化研究所/編	東京：八朔社
長崎被爆荒野	長崎文献社/編	長崎：長崎文献社
長崎ピース・トレイル	MUP ながさき/編	福岡：海鳥社
長崎よ、誓いの火よ	渡辺 千恵子/著	東京：草の根出版会

長崎よみがえる原爆写真	NHK 取材班／著	東京：日本放送出版協会
ナガサキは語りつぐ	長崎市／編	東京：岩波書店
長野県満州開拓誌 上巻		松本：郷土出版社
長野県満州開拓誌 下巻		松本：郷土出版社
二重被爆	稲塚 秀孝／著	東京：合同出版
日録長野県の太平洋戦争 第8巻	長田 広夫／[ほか]編集	松本：郷土出版社
日本原爆論大系 第1巻	坂本 義和／監修	東京：日本図書センター
日本原爆論大系 第2巻	坂本 義和／監修	東京：日本図書センター
日本原爆論大系 第3巻	坂本 義和／監修	東京：日本図書センター
日本原爆論大系 第4巻	坂本 義和／監修	東京：日本図書センター
日本原爆論大系 第5巻	坂本 義和／監修	東京：日本図書センター
日本原爆論大系 第6巻	坂本 義和／監修	東京：日本図書センター
日本原爆論大系 第7巻	坂本 義和／監修	東京：日本図書センター
日本の原爆	保阪 正康／著	東京：新潮社
日本の原爆記録 1	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 2	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 3	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 4	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 5	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 6	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 7	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 8	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 9	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 10	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 11	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 12	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 13	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 14	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 15	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 16	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 17	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 18	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 19	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆記録 20	家永 三郎／[ほか]編集	東京：日本図書センター
日本の原爆文学 1		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 2		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 3		東京：ほるぷ出版

日本の原爆文学 4		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 5		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 6		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 7		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 8		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 9		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 10		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 11		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 12		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 13		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 14		東京：ほるぷ出版
日本の原爆文学 15		東京：ほるぷ出版
ノーモアヒロシマ・ナガサキ	黒古 一夫／編	東京：日本図書センター
野坂昭如戦争童話集 沖縄篇[2]	野坂 昭如／作	東京：講談社
8月9日の語り部	笠原 美代／著	東京：光陽出版社
母と子でみる広島・長崎	朝日新聞企画部／編	東京：草土文化
爆心地ヒロシマに入る	林 重男／著	東京：岩波書店
非核太平洋被爆太平洋	前田 哲男／著	東京：筑摩書房
引き裂かれながら私たちは書いた	丸屋 博／編	東京：西田書店
被爆	江成 常夫／著	東京：小学館
被曝の世紀	キャサリン・コーフィールド／著	東京：朝日新聞社
被爆者	森下 一徹／著	東京：ほるぷ出版
<被爆者>になる	高山 真／著	東京：せりか書房
ヒバクシャの心の傷を追って	中澤 正夫／著	東京：岩波書店
被爆者はなぜ原爆症認定を求めるのか	伊藤 直子／[著]	東京：岩波書店
被爆者たちの戦後50年	栗原 淑江／[著]	東京：岩波書店
被爆樹巡礼	杉原 梨江子／著	東京：実業之日本社
秘録満州国終焉の前後	酒井 彌一郎／著	酒井好子
ヒロコ生きて愛	田坂 博子／著	東京：学研
広島	米山 リサ／著	東京：岩波書店
広島	岩波書店編集部／編集	東京：岩波書店
ヒロシマ 第6版	広島平和文化センター／編	広島平和文化センター
ひろしま	石内 都／著	東京：集英社
ヒロシマあの時、原爆投下は止められた	TBS テレビ「ヒロシマ」制作スタッフ／編	東京：毎日新聞社
広島へそしてヒロシマへ	中本 たか子／著	
広島から世界の平和について考える	広島大学文書館／編	東京：現代史料出版

ヒロシマから問う	「対話ノート」編集委員会／編	京都：かもがわ出版
広島・軍司令部壊滅	穴戸 幸輔／著	東京：読売新聞社
広島原爆写真集	反核・写真運動／監修	東京：勉誠出版
ヒロシマ・コレクション	土田 ヒロミ／撮影	東京：日本放送出版協会
ヒロシマ散歩	植野 浩／著	東京：汐文社
ヒロシマ・残留放射能の四十二年	NHK 広島局・原爆プロジェクト・チーム／著	東京：日本放送出版協会
ヒロシマ巡礼	小谷 瑞穂子／著	東京：筑摩書房
ヒロシマ戦後史	宇吹 暁／著	東京：岩波書店
広島第二県女二年西組		筑摩書房
ヒロシマという思想	松元 寛／著	東京：東京創元社
ヒロシマと広島	浅井 基文／著	京都：かもがわ出版
HIROSHIMA NAGASASKI	広島平和文化センター／編	広島平和文化センター
HIROSHIMA NAGASAKI	広島平和文化センター／編	広島平和文化センター
広島・長崎への原爆投下再考	木村 朗／著	京都：法律文化社
ヒロシマ・ナガサキを世界へ	肥田 舜太郎／著	東京：あけび書房
ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ	黒古 一夫／編	東京：勉誠出版
ヒロシマナガサキ原爆写真・絵画集成 2		日本図書センター
ヒロシマナガサキ原爆写真・絵画集成 3		日本図書センター
ヒロシマナガサキ原爆写真・絵画集成 4		日本図書センター
ヒロシマナガサキ原爆写真・絵画集成 5		日本図書センター
ヒロシマナガサキ原爆写真・絵画集成 6		日本図書センター
広島・長崎の原爆災害	広島市・長崎市原爆災害誌編集委員 ／著	岩波書店
広島・長崎の平和宣言	鎌田 定夫／編著	東京：平和文化
ヒロシマにきた大統領	朝日新聞取材班／著	東京：筑摩書房
ヒロシマの記録	中国新聞社メディア開発局出版部 ／企画・編集	広島：中国新聞社
ヒロシマの原点へ	松江 澄／著	東京：社会評論社
ヒロシマの声を聞こう 3版		原爆碑・遺跡案内刊行委員会

ヒロシマの少年少女たち	関 千枝子／著	東京：彩流社
広島のパオリストたち	増岡 敏和／著	新日本出版社
ヒロシマの「生命の木」	大江 健三郎／著	東京：日本放送出版協会
ヒロシマの空に開いた落下傘 70 年目の 真実	河内 朗／著	東京：言視舎
ヒロシマ花一輪物語	川良 浩和／著	東京：径書房
広島反転爆撃の証明	若木 重敏／著	東京：文芸春秋
ヒロシマ爆心地	NHK 広島局・原爆プロジェクト・チ ーム／著	東京：日本放送出版協会
広島爆心地中島	原爆遺跡保存運動懇談会／編	東京：新日本出版社
ヒロシマ・モニュメント 2	土田 ヒロミ／著	東京：冬青社
ヒロシマ四十年	中国新聞社／編	東京：平凡社
ヒロシマはどう記録されたか 上	小河原 正己／著	東京：朝日新聞出版
ヒロシマはどう記録されたか 下	小河原 正己／著	東京：朝日新聞出版
ピカドンの青春	小井手 桂子／著	東京：三修社
ふたたび被爆者をつくるな 本巻	日本原水爆被害者団体協議会日本 被団協史編集委員会／編著	東京：あけび書房
From ひろしま	石内 都／著	東京：求龍堂
文学に見る戦争と平和	伊豆 利彦／著	東京：本の泉社
平和への想い 2009		東京：日本戦災遺族会
平和への想い 2010		東京：日本戦災遺族会
平和への願いをこめて	広島平和文化センター／編	広島平和文化センター
平和を考えるための100冊+α	日本平和学会／編	京都：法律文化社
平和をめぐる14の論点	日本平和学会／編	京都：法律文化社
平和を求めつづけて		越谷：かど創房
平和祈年事業特別基金収集資料写真集	平和祈年事業特別基金／編	平和祈年事業特別基金
“平和都市ヒロシマ”を問う	湯浅 一郎／著	東京：技術と人間
平和のために戦争を考える	眞嶋 俊造／著	東京：丸善出版
平和の芽	横山 秀夫／著	東京：講談社
米軍占領下の原爆調査	笹本 征男／著	東京：新幹社
葬られた原爆展	フィリップ・ノビーレ／著	東京：五月書房
WHY JAPAN	アージュン・マキジャニ／著	教育社
忘却の記憶 広島	東 琢磨／編	調布：月曜社
僕のお嫁さんになってね	高田 充也／文	長野：ほおずき書籍
ポツダム少尉	Daisuke Miyauchi／[著]	石岡：宮内大輔
ポツダム少尉	[宮内 大輔／著]	石岡：宮内大輔
真赤な原子雲	こばと幼稚園平和教育委員会／編	東京：汐文社

増岡敏和全詩集	増岡 敏和／著	東京：コールサック社
幻の声	白井 久夫／著	東京：岩波書店
まんが少年、空を飛ぶ	山崎 祐則／著	東京：偕成社
見て視て観てみ歩いてみてみ！		生活協同組合コープながの
遺言「ノー・モア・ヒロシマ」 第2集	ヒロシマ青空の会／編集	ヒロシマ青空の会
ユネスコ世界遺産原爆ドーム	中国新聞社／編	広島：中国新聞社
横から見た原爆投下作戦	秋吉 美也子／著	東京：元就出版社
わが心のヒロシマ	オスマン・プティ／著	東京：勁草書房
私たちは敵だったのか	袖井 林二郎／著	東京：岩波書店
わたしは核を見た	ロジャー・ローゼンブラット／著	東京：草思社
わたしは核を見た	ロジャー・ローゼンブラット／著	東京：草思社
愛新覚羅王女の悲劇	太田 尚樹／著	東京：講談社
暗黒日記	清沢 洌／著	評論社
飯田下伊那の少年たちの満州日記	飯田市歴史研究所／編	飯田：飯田市歴史研究所
異国の流れ星	遠藤 茂／著者	満州開拓青年義勇隊
一年生のとき戦争が始まった	信州智里東国民学校昭和 21 年度卒 同級会／文	東京：農山漁村文化協会
伊那谷の青い空に	久保田 誼／著	長野：銀河書房
岩陰の語り	松代大本営労働証言集編集委員会 ／編	松本：郷土出版社
海を越えたマツシロの希(ねが)い	篠ノ井旭高校郷土研究班／編	松本：郷土出版社
鉛筆部隊と特攻隊	きむら けん／著	[東京]：えにし書房
おばあちゃんの満州っ子日記	永井 瑞江／著	長野：信濃毎日新聞社(制作)
親から子に伝える 戦争中のはなし	信州児童文学会／編	松本：郷土出版社
語り伝えておきたくて	『語り伝えておきたくて』編集委員会 ／編	松原地区公民館
語り部の満洲	松井 仁夫／著	銀河書房
上伊那の太平洋戦争	しなのき書房	長野：しなのき書房
川島芳子	川島 芳子／著	東京：日本図書センター
川島芳子記念堂報告書	川島芳子記念室設立実行委員会／ 編	川島芳子記念室設立実行 委員会
川島芳子生死の謎	李 剛／著	名古屋：ブイツーソリューション
消えたくつ	中村 梅子／著	松本：郷土出版社
「キムの十字架」への旅	和田 登／著	長野：信濃毎日新聞社

義勇軍から八路軍へ	佐藤 仁／著	東京：哲学書房
この平和への願い	信濃毎日新聞社編集局／編	信濃毎日新聞社
されど、わが祖国	日垣 隆／著	長野：信濃毎日新聞社
沈まぬ夕陽	中 繁彦／著	長野：信濃毎日新聞社
下伊那のなかの満洲 2	満蒙開拓を語りつぐ会／編	飯田市歴史研究所
下伊那のなかの満洲 4	満蒙開拓を語りつぐ会／編	飯田市歴史研究所
下伊那のなかの満洲 5	満蒙開拓を語りつぐ会／編	飯田市歴史研究所
下伊那のなかの満洲 6	満蒙開拓を語りつぐ会／編	飯田市歴史研究所
下伊那のなかの満洲 7	満蒙開拓を語りつぐ会／編	飯田市歴史研究所
下伊那のなかの満洲 8	満蒙開拓を語りつぐ会／編	飯田：飯田市地域史研究事業準備室
下伊那のなかの満洲 9	満蒙開拓を語りつぐ会／編	飯田：飯田市地域史研究事業準備室
下伊那のなかの満洲 10	満蒙開拓を語りつぐ会／編	飯田：飯田市歴史研究所
下伊那のなかの満洲 1	満蒙開拓を語りつぐ会／編	飯田：飯田市地域史研究事業準備室
下伊那のなかの満洲 3	満蒙開拓を語りつぐ会／編	飯田市歴史研究所
信州昭和史の空白	信濃毎日新聞社編集局／編	長野：信濃毎日新聞社
信州・松本一子どもたちの戦争	手塚 英男／著	
凶録・松代大本営	和田 登／編著	松本：郷土出版社
戦後信州女性史	辻村 輝雄／著	長野県連合婦人会
戦争をした国	平和のための信州・戦争展長野県連絡センター／編	長野：川辺書林
戦争が消した諏訪“震度6”	宮坂 五郎／著	長野：信濃毎日新聞社
戦中戦後を顧みて 続	栗の実会／編	
中国の人々から見た「満洲開拓」「青少年義勇軍」	長野県歴史教育者協議会／編	長野県歴史教育者協議会
中国の人々は「満洲開拓団」・「青少年義勇軍」をどう見ていたか	長野県歴史教育者協議会／編	長野県歴史教育者協議会
朝鮮戦争と長野県民	新津 新生／著	信州現代史研究所
朝鮮人強制連行調査の記録 中部・東海編	朝鮮人強制連行真相調査団／編著	東京：柏書房
誓いの炎	長野県高等学校教職員組合平和教育／編	章文館
伝えたい私たちの戦争体験	松本市行政管理課・松本市文書館	松本市
伝えたい私たちの戦争体験 第二集	松本市行政管理課・松本市文書館	松本市
遠い太鼓 第1集	松本市本郷福祉広場／編	松本市本郷福祉広場
遠い太鼓 第2集	松本市本郷福祉広場／編	松本市本郷福祉広場

遠い太鼓 第3集	遠い太鼓編集委員会／編	遠い太鼓編集委員会
と号第三十一飛行隊「武揚隊」の軌跡	きむら けん／著	[東京]:えにし書房
動乱の蔭に	川島 芳子／著	東京:大空社
長野県民の1945	長野県立歴史館／編	長野県立歴史館
長野・千曲の太平洋戦争	駒込 幸典／監修	長野:しなのき書房
長野県松本市里山辺における朝鮮人・中国人強制労働の記録		里山辺朝鮮人・中国人強制労働調査
長野県満州開拓史 名簿編	長野県開拓自興会満州開拓史刊行会／編	長野県開拓自興会満州開拓史刊行
長野県満州開拓史 総編	長野県開拓自興会満州開拓史刊行会／編	長野県開拓自興会満州開拓史刊行
長野県満州開拓史 各団編	長野県開拓自興会満州開拓史刊行会／編	長野県開拓自興会満州開拓史刊行
長野県民100年史 1		松本:郷土出版社
長野県民100年史 2		松本:郷土出版社
長野県民100年史 3		松本:郷土出版社
長野県民100年史 4		松本:郷土出版社
日録長野県の太平洋戦争 第1巻		松本:郷土出版社
日録長野県の太平洋戦争 第3巻		松本:郷土出版社
日録長野県の太平洋戦争 第2巻		松本:郷土出版社
日録長野県の太平洋戦争 第4巻	長田 広夫／[ほか]編集	松本:郷土出版社
日録長野県の太平洋戦争 第5巻	長田 広夫／[ほか]編集	松本:郷土出版社
日録長野県の太平洋戦争 第6巻	長田 広夫／[ほか]編集	松本:郷土出版社
日録長野県の太平洋戦争 第7巻	長田 広夫／[ほか]編集	松本:郷土出版社
日録長野県の太平洋戦争 第9巻	長田 広夫／[ほか]編集	松本:郷土出版社
遙かなる紅い夕陽	平和祈念事業特別基金／企画・監修	東京:平和祈念事業特別基金
評伝川島芳子	寺尾 紗穂／著	東京:文藝春秋
ひいばあちゃんは中国にお墓をつくった	飯島 春光／著	京都:かもがわ出版
一人ひとりの戦記		松本歩兵第150聯隊戦友会
日の丸は紅い涙に	越 定男／著	教育史料出版会
広島平和祈念式典参加の旅感想文集	松本市／編	松本市

広島平和祈念式典参加の旅感想文集	松本市／編	松本市
ひろしまりポート 1997. 10	松本市／編	松本市
ひろしまりポート 2003. 11	松本市／編	松本市
ひろしまりポート 2004. 12	松本市／編	松本市
ひろしまレポート 2005. 12	松本市総務部行政管理課／編集	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2006. 11	松本市総務部行政管理課／編集	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2007. 11	松本市総務部行政管理課／編集	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2008. 11	松本市総務部行政管理課／編	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2009. 12	松本市総務部行政管理課／編	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2010. 12	松本市総務部行政管理課／編	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2011. 12	松本市総務部行政管理課／編	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2012. 12	松本市総務部行政管理課／編	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2013. 11	松本市総務部行政管理課／編	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2014. 11	松本市総務部行政管理課／編	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2015. 11	松本市総務部行政管理課／編	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2016. 12	松本市総務部行政管理課／編	松本市総務部行政管理課
ひろしまレポート 2017. 12	松本市総務部平和推進課／編	松本市総務部平和推進課
ひろしまレポート 2018. 12	松本市総務部平和推進課／編	松本市総務部平和推進課
ピアニストの兵隊さん	古畑 博子／文	長野：ほおずき書籍
フィールドワーク松代大本営	松代大本営の保存をすすめる会／ 編	東京：平和文化
不戦の誓い	栄村戦争体験記編集委員会／編	栄村公民館
文学作品に見る太平洋戦争と信州 上 巻	井出 孫六／ほか編	長野：一草舎出版
文学作品に見る太平洋戦争と信州 下 巻	井出 孫六／ほか編	長野：一草舎出版
平和への祈り	笹賀老人クラブ連合会／編	笹賀公民館
穂高町の十五年戦争	穂高町戦争体験を語りつぐ会／編	松本：郷土出版社
ボイスライブラリー無言館の証言	無言館／編	東京：新日本出版社
望郷	第六次開拓団南五道崗長野村同志 会／編	満州開拓長野村同志会

松代大本営	青木 孝寿／著	東京：新日本出版社
松代大本営	中村 勝実／著	櫛
松代大本営と崔小岩	松代大本営の保存をすすめる会／ 編	東京：平和文化
「松代大本営」の真実	日垣 隆／著	東京：講談社
松代地下大本営	林 えいだい／著	東京：明石書店
松代でなにがあったか!	西条地区を考える会／編	長野：龍鳳書房
松本連隊の最後	山本 茂美／著	角川書店
松本市における戦時下軍事工場の外国人労働実態調査報告書	松本市史近代・現代部門編集委員会 ／編集	[松本]：松本市
満州・浅間開拓の記	大日向分村開拓団開拓史編纂委員 会／編	長野：銀河書房
満州移民	飯田市歴史研究所／編	東京：現代史料出版
満州移民シンポジウム記録集	長野県歴史教育者協議会／編	長野県歴史教育者協議会
「満州移民」の歴史と記憶	趙 彦民／著	東京：明石書店
満州の夕焼け雲	田端 美恵子／著	長野：信濃毎日新聞社
満州分村の神話 大日向村は、こう描かれた	伊藤 純郎／著	長野：信濃毎日新聞社
満洲泰阜分村	<満洲泰阜分村-七〇年の歴史と記憶>編集委員会／編	[泰阜村(長野県)]：泰阜村
満州・その幻の国ゆえに	林 郁／著	筑摩書房
満州難民行	今井 弥吉／著	築地書館
満蒙開拓青少年義勇軍	桜本 富雄／著	東京：青木書店
満蒙開拓青少年義勇軍シンポジウム記録集	長野県歴史教育者協議会／編	長野県歴史教育者協議会
満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会	長野県歴史教育者協議会／編	東京：大月書店
満蒙開拓の手記	NHK 長野放送局／編	東京：日本放送出版協会
実る稲田は頭垂る	長野俊英高校郷土研究班／編	
無言館	窪島 誠一郎／著	東京：講談社
無言館を訪ねて	窪島 誠一郎／編	東京：講談社
「無言館」にいらっしやい	窪島 誠一郎／著	東京：筑摩書房
「無言館」の坂道	窪島 誠一郎／著	東京：平凡社
無言館の青春	窪島 誠一郎／編・著	東京：講談社
「無言館」ものがたり	窪島 誠一郎／著	東京：講談社
無言館はなぜつくられたのか	野見山 暁治／著	京都：かもがわ出版
夜明けに向かって	長野県教組婦人部のあゆみ編集委員 ／編	長野県教職員組合婦人部

ラバウル航空隊員と松本飛行場の物語	川村 修／著	
わいこっぼがもどってきた	降幡 えつ子／版画・文	
忘れられた特攻隊	きむら けん／著	東京：彩流社
われら在満小国民	井口 利夫／著	長野：ほおずき書籍

松本市中央図書館平和資料コーナー常設図書一覧表 児童図書

書名	著者	出版社
SADAKO AND THE THOUSAND PAPER CRANE	Eleanor Coerr/著	山口書店
アウシュビッツからの手紙	早乙女 勝元/作	東京：日本図書センター
あおよ、かえってこい	早乙女 勝元/著	童心社
青い空	柳生 研太郎/作・画	大阪：風詠社
赤ちゃんと母(ママ)の火の夜	早乙女 勝元/作	東京：新日本出版社
あけもどろの空	高柳 杉子/著	東京：子どもの未来社
朝の別れを	大野 允子/著	東京：ポプラ社
アジアの戦争被害者たち	伊藤 孝司/写真と文	東京：草の根出版会
穴から穴へ13年	早乙女 勝元/編	東京：草の根出版会
あなたは「三光作戦」を知っていますか	坂倉 清/著	東京：新日本出版社
あの日とおなじ空	安田 夏菜/作	東京：文研出版
あの日のこと	西山 進/文・絵	東京：クリエイティブ21
あやと青い目の人形	松永 照正/著	東京：クリエイティブ21
ありがとう地雷ではなく花をください	葉 祥明/絵	東京：自由国民社
あるいてみよう広島のみち	広島平和教育研究所/編	広島平和教育研究所出版部
生きのびる	田村 和子/文	東京：草の根出版会
石になった少女	大城 将保/作	東京：高文研
いしぶみ	広島テレビ放送/編	東京：ポプラ社
犬やねこが消えた	井上 こみち/文	東京：学研
いのち	窪島 誠一郎/作	東京：アリス館
生命をみつめる	早乙女 勝元/編	東京：草の根出版会
いのちのパスポート	アブラハム・クーパー/文	東京：潮出版社
いのちの物語	仁科 惇/文	松本：郷土出版社
いのりの石	こやま 峰子/文	東京：フレーベル館
いわたくんちのおばあちゃん	天野 夏美/作	東京：主婦の友社
ウサギ国平和憲法	神津 良子/文	松本：郷土出版社
海をわたった折り鶴	石倉 欣二/作	東京：小峰書店
海をわたったヒロシマの人形	指田 和/文	東京：文研出版
海をわたる被爆ピアノ	矢川 光則/著	東京：講談社
ウミガメと少年	野坂 昭如/作	小金井：スタジオジブリ
絵で読む広島原爆	那須 正幹/文	東京：福音館書店

えっちゃんのせんそう	岸川 悦子／作	東京：文溪堂
映画で平和を考える	上田 精一／[著]	東京：草の根出版会
おかあさんの紙ひな	長崎 源之助／作	東京：岩崎書店
お母ちゃんお母ちゃーんむかえにきて	奥田 継夫／ぶん	東京：小峰書店
おかあちゃんごめんね	早乙女 勝元／作	東京：日本図書センター
おかえり!ユキ	櫻井 いと／文	松本：郷土出版社
おかしいやんか	原田 一美／著	東京：未知谷
おきなわ 島のこえ	丸木 俊／文・絵	東京：小峰書店
沖縄地上戦	共同通信社／写真	東京：草の根出版会
沖縄の自然と文化シリーズ 10		東京：ポプラ社
沖縄戦とアイヌ兵士	橋本 進／編	東京：草の根出版会
沖縄戦と教科書	安仁屋 政昭／[著]	東京：草の根出版会
臆病者と呼ばれても	マーカス・セジウィック／作	東京：あかね書房
おこりじぞう	山口 勇子／原作	東京：金の星社
オジイの海	尚子／作	東京：新風舎
おじいちゃん	神津 良子／文	松本：郷土出版社
お手玉のうた	神津 良子／文	松本：郷土出版社
おとなになれなかった 弟たちに…	米倉 斉加年／作	東京：偕成社
おとむらいに行った上田のカラス	滝沢 きわこ／文	松本：郷土出版社
おなあちゃん	多田乃 なおこ／著	東京：富山房インターナショナル
鬼風の伝説	藤牧 久美子／文	松本：郷土出版社
おねだりゾウさん	神津 良子／文	松本：郷土出版社
お話しかせてクリストフ	ニキ・コーンウェル／作	東京：文研出版
おばあちゃんの人形	佛教大学社会福祉学部・黒岩ゼミ／ 脚本・画	東京：本の泉社
おばあちゃんのももの木	山本 玲子／作	東京：汐文社
おまもり	リラ・パール／著	東京：あすなろ書房
おもいだしてくださいあの子どもたち を	チャナ・バイヤーズ・アベルス／こ うせい・ぶん	東京：ほるぷ出版
おもいで箱	松永 伍一／ほか著	東京：汐文社
おりづるにのって	中村 里美／文	町田：ミューズの里
滑走路と少年土工夫	松本 成美／編	東京：草の根出版会
かあさんのうた	大野 允子／文	東京：ポプラ社
傘の舞った日	日本児童文学者協会／編	東京：新日本出版社
火城	蔡 皋／文	東京：童心社
語りつごうアジア・太平洋戦争 1	和歌森 太郎／[ほか]編集	東京：岩崎書店

語りつごうアジア・太平洋戦争 2	和歌森 太郎/[ほか]編集	東京：岩崎書店
語りつごうアジア・太平洋戦争 3	和歌森 太郎/[ほか]編集	東京：岩崎書店
語りつごうアジア・太平洋戦争 4	和歌森 太郎/[ほか]編集	東京：岩崎書店
語りつごうアジア・太平洋戦争 5	和歌森 太郎/[ほか]編集	東京：岩崎書店
語りつごうアジア・太平洋戦争 6	和歌森 太郎/[ほか]編集	東京：岩崎書店
語りつごうアジア・太平洋戦争 7	和歌森 太郎/[ほか]編集	東京：岩崎書店
語りつごうアジア・太平洋戦争 8	和歌森 太郎/[ほか]編集	東京：岩崎書店
語りつごうアジア・太平洋戦争 10	和歌森 太郎/[ほか]編集	東京：岩崎書店
語り伝えるアジア・太平洋戦争 第1巻	吉田 裕/文・監修	東京：新日本出版社
語り伝えるアジア・太平洋戦争 第2巻	吉田 裕/文・監修	東京：新日本出版社
語り伝えるアジア・太平洋戦争 第3巻	吉田 裕/文・監修	東京：新日本出版社
語り伝えるアジア・太平洋戦争 第4巻	吉田 裕/文・監修	東京：新日本出版社
語り伝えるアジア・太平洋戦争 第5巻	吉田 裕/文・監修	東京：新日本出版社
語り伝える沖縄 第1巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝える沖縄 第2巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝える沖縄 第3巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝える沖縄 第4巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝える沖縄 第5巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝える空襲 第1巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝える空襲 第2巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝える空襲 第3巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝える空襲 第4巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝える空襲 第5巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝える東京大空襲 第1巻	早乙女 勝元/監修	東京：新日本出版社
語り伝える東京大空襲 第2巻	早乙女 勝元/監修	東京：新日本出版社
語り伝える東京大空襲 第3巻	早乙女 勝元/監修	東京：新日本出版社
語り伝える東京大空襲 第4巻	早乙女 勝元/監修	東京：新日本出版社
語り伝える東京大空襲 第5巻	早乙女 勝元/監修	東京：新日本出版社
語り伝えるヒロシマ・ナガサキ 第1巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝えるヒロシマ・ナガサキ 第2巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝えるヒロシマ・ナガサキ 第3巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝えるヒロシマ・ナガサキ 第4巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
語り伝えるヒロシマ・ナガサキ 第5巻	安斎 育郎/文 監修	東京：新日本出版社
悲しい顔のマリア	原 之夫/作 絵	東京：汐文社
カメラ片手に辺境に行く	塩野 洋/[著]	東京：草の根出版会
枯れ葉剤とガーちゃん	早乙女 勝元/[著]	東京：草の根出版会
かわいそうなぞう	つちや ゆきお/ぶん	東京：金の星社

かわいそうなぞう	土家 由岐雄／作	東京：金の星社
かわいそうなぞう	土家 由岐雄／著	童心社
ガマ	豊田 正義／著	東京：講談社
ガマに刻まれた沖縄戦	上羽 修／写真と文	東京：草の根出版会
ガラスのうさぎ	高木 敏子／作	東京：金の星社
ガラスの梨	越水 利江子／作	東京：ポプラ社
9番目の戦車	ときた ひろし／著	東京：復刊ドットコム
京劇がきえた日	姚 紅／作	東京：童心社
きえないヒョウのつめあと	甲斐 望／文	東京：学研
きみに聞いてほしい	[バラク・オバマ／述]	東京：リンダパブリッシャーズ
君の話をきかせてアメール	ニキ・コーンウェル／作	東京：文研出版
きらきら姫のねがい	いざき ときえ／文	松本：郷土出版社
くちなしの花八月	児玉 辰春／文	東京：草土文化
くつがいく	和歌山 静子／作	東京：童心社
ゲルニカ	早乙女 勝元／編	東京：草の根出版会
ゲンバクとよばれた少年	中村 由一／著	東京：講談社
原爆ドームの祈り	長谷川 敬／文	東京：講談社
原爆の凶物語	宇佐美 承／作	東京：小峰書店
原爆の火	岩崎 京子／文	東京：新日本出版社
氷の海を追ってきたクロ	井上 こみち／文	東京：学研教育出版
小型武器よさらば	柳瀬 房子／文	東京：小学館
心をこめて地雷ではなく花をください	葉 祥明／絵	東京：自由国民社
子どものころ戦争があった	あかね書房／編	あかね書房
こども平和文集 22		東京：中村堂
こども平和文集 23		東京：中村堂
子どもたちの8月15日	岩波新書編集部／編	東京：岩波書店
こんなに恐ろしい核兵器 1	鈴木 達治郎／著	東京：ゆまに書房
こんなに恐ろしい核兵器 2	鈴木 達治郎／著	東京：ゆまに書房
さがしています	アーサー・ビナード／作	東京：童心社
さくら	田畑 精一／作	東京：童心社
さくらとモモ	神津 良子／文	松本：郷土出版社
桜の花の散る頃に	竹本 祐子／文	松本：郷土出版社
禎子の千羽鶴	佐々木 雅弘／著	東京：学研パブリッシング
さとうきび畑の唄	遊川 和彦／著	東京：汐文社
サニーちゃん、シリアへ行く	葉 祥明／絵	東京：自由国民社
少女と風船爆弾	日台 愛子／作	東京：理論社

少年口伝隊一九四五	井上 ひさし／著	東京：講談社
しあわせの白いうさぎ	那須田 稔／作	東京：ポプラ社
塩むすび	高田 充也／文	松本：郷土出版社
シゲコ！	菅 聖子／著	東京：偕成社
シマが基地になった日	真鍋 和子／著	東京：金の星社
シリーズ戦争遺跡 1		東京：汐文社
シリーズ戦争遺跡 2		東京：汐文社
シリーズ戦争遺跡 3		東京：汐文社
シリーズ戦争遺跡 4		東京：汐文社
シリーズ戦争遺跡 5		東京：汐文社
シリーズ戦争孤児 1		[東京]：汐文社
シリーズ戦争孤児 2		[東京]：汐文社
シリーズ戦争孤児 3		[東京]：汐文社
シリーズ戦争孤児 4		[東京]：汐文社
シリーズ戦争孤児 5		[東京]：汐文社
白いマフラー	神津 良子／文	松本：郷土出版社
死んでもブレストを	早乙女 勝元／作	東京：日本図書センター
字のないはがき	向田 邦子／原作	東京：小学館
10代の教養図書館 21		東京：ポプラ社
14歳の生涯	中本 昭／ほか作	東京：汐文社
じいじが迷子になっちゃった	城戸 久枝／著	東京：偕成社
地雷ではなく花をください 続	葉 祥明／絵	東京：自由国民社
地雷ではなく花をください 続々	葉 祥明／絵	東京：自由国民社
スーチーさんのいる国	早乙女 勝元／編	東京：草の根出版会
すずらん燈	神津 良子／文	松本：郷土出版社
すみれ島	今西 祐行／文	東京：偕成社
世界の旅から	早乙女 勝元／[著]	東京：草の根出版会
世界のボランティア	鈴木 真理子／[著]	東京：草の根出版会
せんそう	塚本 千恵子／文	東京：東京書籍
戦争をめぐりぬけたおさるのジョージ	ルイーズ・ボーデン／文	東京：岩波書店
せんそうをはしりぬけた『かば』でんし ゃ	間瀬 なおかた／作・絵	東京：ひさかたチャイルド
戦争が終わっても	高橋 邦典／写真・文	東京：ポプラ社
戦争孤児のダーちゃん	早乙女 勝元／[著]	東京：草の根出版会
戦争体験を「語り」・「継ぐ」	大石 学／監修	東京：学研プラス
戦争体験刻む	編集委員会／[編]	東京：草の根出版会
戦争とインドネシア残留日本兵	長 洋弘／写真と文	東京：草の根出版会

戦争と子ども	共同通信社／写真	東京：草の根出版会
戦争と北方少数民族	田中 了／編	東京：草の根出版会
戦争なんて、もうやめて	佐藤 真紀／編	東京：大月書店
戦争にでかけたおしらすま	さねとう あきら／著	サンリード
戦争は終わった	ハインリッヒ・ベル／[ほか]著	東京：ほるぷ出版
戦争はなぜ起こるか	佐藤 忠男／著	東京：ポプラ社
零戦パイロットからの遺言	原田 要／[述]	東京：講談社
そして、トンキーもしんだ	たなべ まもる／ぶん	東京：国土社
それから	榎田 伸子／作 絵	東京：汐文社
ターニャの日記	早乙女 勝元／文	東京：日本図書センター
太平洋戦争	共同通信社／写真	東京：草の根出版会
台湾からの手紙	早乙女 勝元／編	東京：草の根出版会
凧になったお母さん	野坂 昭如／原作	東京：日本放送出版協会
旅でみつめた戦争と平和	重田 徹弘／写真と文	東京：草の根出版会
だっこの木	宮川 ひろ／作	東京：文溪堂
春姫という名前の赤ちゃん	ピョン キジャ／文	東京：童心社
ちっちゃいこえ	アーサー・ビナード／脚本	東京：童心社
小さい潜水艦に恋をしたでかすぎるクジラの話	野坂 昭如／原作	東京：日本放送出版協会
ちいちゃんのかげおくり	あまん きみこ／作	東京：あかね書房
千曲川のほとりで	今西 美奈子／文	生駒：まごころの集い社
地図にない島へ	武田 英子／文	東京：農山漁村文化協会
つきよのたけとんぼ	梅田 俊作／作	東京：新日本出版社
つしま丸のそうなん	金沢 嘉市／編著	東京：あすなろ書房
椿の詩	茂吉 雅典／[著]	調布：けやき書房
つる	エリナー・コア／文	東京：日本図書センター
つるに のって	ミホ シボ／原案	金の星社
つるちゃん	金城 明美／ぶん・え	東京：絵本『つるちゃん』 を出版する会
定本さねとうあきらの本 1	さねとう あきら／著	川崎：てらいんく
手作りのランドセル	小林 しげる／文	松本：郷土出版社
天に焼かれる	金崎 是／作 絵	東京：汐文社
デイゴの花	桜井 信夫／文	東京：国土社
東京大空襲を忘れない	瀧井 宏臣／著	東京：講談社
とうきび	クオン ジョンセン／詩	東京：童心社
父さんはどうしてヒトラーに投票したの？	ディディエ・デニクス／文	大阪：解放出版社

父さんたちが生きた日々	岑 龍／作	東京：童心社
とうろうながし	松谷 みよ子／文	東京：偕成社
トビウオのぼうやはびょうきです	いぬい とみこ／作	東京：金の星社
飛べ!千羽づる	手島 悠介／著	東京：講談社
永井隆	中井 俊巳／著	東京：童心社
ナガサキに翔ぶ	山脇 あさ子／著	東京：新日本出版社
なぜ、おきたのか?	クライヴ・A. ロートン／作	東京：岩崎書店
夏の記憶	丘 修三／作	東京：汐文社
夏の花たち	鈴木 ゆき江／著	舞阪町(静岡県)：ひくまの出版
ななしのごんべさん	田島 征彦／作	東京：童心社
ナパーム弾とキムちゃん	早乙女 勝元／[著]	東京：草の根出版会
日中戦争 1	共同通信社／写真	東京：草の根出版会
日中戦争 2	共同通信社／写真	東京：草の根出版会
憎しみを乗り越えて	佐藤 真澄／著	東京：汐文社
二せきの魚雷艇	坪田 理基男／文	東京：国土社
二せきの魚雷艇	坪田 理基男／文	東京：国土社
二度と	松井 エイコ／脚本・絵	東京：童心社
日本にも戦争があった	篠塚 良雄／著	東京：新日本出版社
日本の戦争と動物たち 1		東京：汐文社
日本の戦争と動物たち 2		東京：汐文社
日本の戦争と動物たち 3		東京：汐文社
ねえ、おかあさんさがして	花崎 みさを／[著]	東京：草の根出版会
ねえちゃん!まって	東川 豊子／文	東京：草土文化
野坂昭如戦争童話集 沖縄篇[1]	野坂 昭如／作	東京：講談社
のぼら	小川 未明／著	童心社
走れひばく電車	まさき かずみ／文	広島：ひろしま女性学研究所(発売)
八月がくるたびに	おおえ ひで／作	東京：理論社
八月の風船	野坂 昭如／原作	東京：日本放送出版協会
8月6日のこと	中川 ひろたか／文	東京：ハモニカブックス
母と戦とコスモスと	小林 しげる／文	松本：郷土出版社
母と子でみるアンネ・フランク	早乙女 勝元／編	東京：草の根出版会
母と子でみる壁の消えたベルリン	山本 耕二／編	東京：草の根出版会
母と子でみる反戦平和に生きた人びと	塩田 庄兵衛／編	東京：草の根出版会
ハンナのかばん	カレン・レビン／著	東京：ポプラ社
半分のふるさと	イ サンクム／著	東京：福音館書店

パパママバイバイ	早乙女 勝元／作	東京：日本図書センター
火の壁をくぐったヤギ	岩崎 京子／文	東京：国土社
火の壁をくぐったヤギ	岩崎 京子／文	東京：国土社
100人が語る戦争とくらし 1	大石 学／監修	東京：学研プラス
100人が語る戦争とくらし 2	大石 学／監修	東京：学研プラス
100人が語る戦争とくらし 3	大石 学／監修	東京：学研プラス
氷海のクロ	神津 良子／文	松本：郷土出版社
左手がなくてもぼくは負けない!	高橋 うらら／文	東京：学研教育出版
一つの花	今西 祐行／文	東京：ポプラ社
ヒバクシャ	桐生 広人／写真と文	東京：草の根出版会
被爆者 [正]	会田 法行／写真・文	東京：ポプラ社
被爆者 続	会田 法行／写真・文	東京：ポプラ社
非武装地帯に春がくると	イ オクベ／作	東京：童心社
ヒロシマをのこす	佐藤 真澄／著	東京：汐文社
ヒロシマ語り部の歌	大野 允子／作	東京：汐文社
ヒロシマ消えたかぞく	指田 和／著	東京：ポプラ社
ヒロシマ心の旅路	児玉 辰春／著	東京：岩崎書店
広島・長崎からの伝言	大川 悦生／編著	東京：岩崎書店
ヒロシマに生きて	原田 東岷／[著]	東京：草の根出版会
ヒロシマに原爆がおとされたとき	大道 あや／著	東京：ポプラ社
広島のアリ	赤座 憲久／作	東京：汐文社
ヒロシマのいのち	指田 和／著	東京：文研出版
ヒロシマのいのちの水	指田 和／文	東京：文研出版
ヒロシマのうた	日本児童文学者協会／編	東京：小峰書店
ひろしまのエノキ	長崎 源之助／作	東京：童心社
広島の子供	山本 真理子／作	東京：岩崎書店
広島の子	山本 真理子／作	東京：岩崎書店
ひろしまのピカ	丸木 俊／え・文	東京：小峰書店
ひろしまのピカ	丸木 俊／え・文	東京：小峰書店
ヒロシマ、八月、炎の鎮魂歌(レクイエム)	大野 允子／作	東京：ポプラ社
ビジュアル版平和博物館・戦跡ガイド 1	佐藤 広基／イラスト・文	東京：汐文社
ビジュアル版平和博物館・戦跡ガイド 2	佐藤 広基／イラスト・文	東京：汐文社
ビジュアル版平和博物館・戦跡ガイド 3	佐藤 広基／イラスト・文	東京：汐文社

びんたあめあられ	水谷 章三／文	東京：国土社
ピアニストの兵隊さん	古畑 博子／文	松本：郷土出版社
ピアノは知っている	毛利 恒之／原作・文	東京：自由国民社
ピカドン	小崎 侃／作 版画	東京：汐文社
ピカドン		東京：講談社
ピンク色の雲	宇留賀 佳代子／文	川崎：てらいんく
フィリピン残留日系人	鈴木 賢士／写真と文	東京：草の根出版会
風船爆弾	福島 のりよ／作	東京：富山房インターナショナル
ふたりのイーダ	松谷 みよ子／著	東京：講談社
ふりそでの少女	松添 博／作 絵	東京：汐文社
ブラジルへ	藤崎 康夫／[著]	東京：草の根出版会
兵隊ばあさん	赤座 憲久／著	学校図書
兵隊さんに愛されたヒョウのハチ	祓川 学／作	東京：ハート出版
へいわってどんなこと？	浜田 桂子／作	東京：童心社
へいわってどんなこと？	浜田 桂子／作	東京：童心社
平和へ	キャサリン・スコールズ／作	東京：岩崎書店
平和を考えよう 1	下郷 さとみ／文	東京：あかね書房
平和を考えよう 2	下郷 さとみ／文	東京：あかね書房
平和をかんがえるこども俳句の写真絵本		東京：小学館
平和を考える戦争遺産図鑑	安島 太佳由／写真 著	東京：岩崎書店
平和を考える戦争遺物 1		東京：汐文社
平和を考える戦争遺物 2		東京：汐文社
平和を考える戦争遺物 3		東京：汐文社
平和を考える戦争遺物 4		東京：汐文社
平和を考える戦争遺物 5		東京：汐文社
平和学習に役立つ戦跡ガイド 1	平和学習に役立つ戦跡ガイド編集委員会／編	東京：汐文社
平和学習に役立つ戦跡ガイド 2	平和学習に役立つ戦跡ガイド編集委員会／編	東京：汐文社
平和学習に役立つ戦跡ガイド 3	平和学習に役立つ戦跡ガイド編集委員会／編	東京：汐文社
平和のたからもの	寺田 志桜里／ぶん・え	東京：くもん出版
平和のバトン	弓狩 匡純／著	東京：くもん出版
ベエが戦争に行った日	野々下 留美／文	東京：新風舎
ベトちゃんドクちゃんからのてがみ	松谷 みよ子／文	東京：童心社

ベトナムに春近く	早乙女 勝元／編	東京：草の根出版会
報道写真に生きる	桑原 史成／写真と文	東京：草の根出版会
星になった子ねずみ	手島 悠介／作	東京：講談社
ホロコーストの跡を訪ねる	荒井 信一／文	東京：草の根出版会
ぼうさまになったからす	松谷 みよ子／著	偕成社
ぼくと戦争の物語	漆原 智良／作	東京：フレーベル館
ぼくのこえがきこえますか	田島 征三／作	東京：童心社
ぼくの見た戦争	高橋 邦典／写真・文	東京：ポプラ社
ぼくは生きている	尾崎 正義／作 絵	東京：汐文社
菩提樹とさるすべりの花	わらび さぶろう／詩	東京：らくだ出版
まっ黒なおべんとう	児玉 辰春／作	東京：新日本出版社
まっ黒なおべんとう	児玉 辰春／文	東京：新日本出版社
まいづるへの旅	神津 良子／文	松本：郷土出版社
またあしたあそぼうね	山下 ますみ／文	東京：新日本出版社
真夏のオリオン	福井 晴敏／文	東京：講談社
マブニのアンマー	赤座 憲久／文	東京：ほるぷ出版
魔法のぶた	司 修／作・絵	東京：汐文社
ミエさんの戦争	長 洋弘／写真と文	東京：草の根出版会
ミサコの被爆ピアノ	松谷 みよ子／文	東京：講談社
水俣の人びと	桑原 史成／[著]	東京：草の根出版会
みのかさ隊奮闘記	儀間 比呂志／文・絵	東京：ルック
みんなが知りたい!世界と日本の「戦争遺産」戦跡から平和を学ぶ本	歴史学習研究会／著	東京：メイツ出版
ムッチャン	中川 正文／文	東京：山口書店
麦畑のカマキリ	和田 勝恵／作	東京：汐文社
目でみる「戦争と平和」ことば事典 1	早乙女 勝元／監修	東京：日本図書センター
目でみる「戦争と平和」ことば事典 2	早乙女 勝元／監修	東京：日本図書センター
目でみる「戦争と平和」ことば事典 3	早乙女 勝元／監修	東京：日本図書センター
もくれんの花	神津 良子／文	松本：郷土出版社
やぎが育てた赤ん坊	土屋 美智子／作	東京：汐文社
約束	窪島 誠一郎／作	東京：アリス館
やくそくのどんぐり	大門 高子／文	東京：新日本出版社
焼け跡に風が吹く	山福 康政／著	東京：福音館書店
焼け跡の、お菓子の木	野坂 昭如／原作	東京：日本放送出版協会
やけあとの競馬うま	木暮 正夫／文	東京：国土社
焼けあとのちかい	半藤 一利／文	東京：大月書店
やさしい木曾馬	庄野 英二／文	東京：偕成社

友情は戦火をこえて	石井 美樹子／作	京都：PHP 研究所
ゆめくい雲とアッコちゃん	黒崎 美千子／作 絵	東京：汐文社
よしこがもえた	たかとう 匡子／作	東京：新日本出版社
読み聞かせる戦争	加賀美 幸子／選	東京：光文社
りゅう子の白い旗	新川 明／文	東京：築地書館
わすれていてごめんね	緒方 俊平／画・文	広島：ガリバープロダクツ
わすれないあの日	三代沢 史子／えと文	東京：日本図書センター
忘れな石	宮良 作／文	東京：日本図書センター
わすれないで	赤坂 三好／文・絵	東京：金の星社
わたしの沖縄戦 1	行田 稔彦／著	東京：新日本出版社
わたしの沖縄戦 2	行田 稔彦／著	東京：新日本出版社
わたしの沖縄戦 3	行田 稔彦／著	東京：新日本出版社
わたしの沖縄戦 4	行田 稔彦／著	東京：新日本出版社
わたしの8月15日	あかね書房／編	あかね書房
わたしの見たかわいそうなゾウ	澤田 喜子／著	国立：今人舎
わたしは日本軍「慰安婦」だった	李 容洙／著	東京：新日本出版社
わたしたちのアジア・太平洋戦争 1	古田 足日／編	東京：童心社
わたしたちのアジア・太平洋戦争 2	古田 足日／編	東京：童心社
わたしたちのアジア・太平洋戦争 3	古田 足日／編	東京：童心社
わたしたちの教科書	徳武 敏夫／編	東京：草の根出版会
わたしたちの「無言館」	窪島 誠一郎／作	東京：アリス館
湾岸戦争症候群	松野 哲朗／文	東京：草の根出版会

平和都市宣言

世界の恒久平和は人類共通の願いである。

われわれは、平和を愛するすべての人々とともに、
核兵器の廃絶と戦争のない明るい住みよいあすの郷土
を願い、ここに「平和都市」の宣言をする。

昭和61年9月25日

宣言の趣旨は、平和の確保・核兵器の廃絶を願いとしています。
私たち松本市の「平和都市宣言」が力強い宣言となるよう、暮らしに根ざして、平和の願いを大きく、根強く、たくましく育て続けていくことが大切です。

ひろしま レポート

第29回広島平和記念式典参加事業及び西予市交流事業

2020.2

編集発行：松本市 総務部 平和推進課



松本市役所前庭に設置されている「平和の^{ともしび}灯」

松本市では、松本市平和都市宣言の理念に基づき、一人ひとりが命を大切にし、永久に平和であることを願い、平和を創つくる取り組みを広げるため、「平和の灯」を灯しました。

この灯が市民の平和のシンボルとなり、多くの皆さんが命の大切さや平和の尊さを考え、平和の連鎖がより一層広がっていくことを願っています。



美しく生きる。



健康寿命延伸都市・松本